

П・И・メーリニコフ＝ペチュールスキイとその時代（上）

坂内 徳明

はじめに

問題の所在　メーリニコフ＝ペチュールスキイへの関心

第一章　メーリニコフ＝ペチュールスキイの生涯と文学活動

生まれ／大学卒業から「ペチュールスキイ」誕生まで／役人として／同時期の文学活動と民俗研究／  
『森の中で』の執筆と晩年

第二章　作品『森の中で』の世界

作品の舞台ならびに登場人物／物語の展開

第三章　民俗学の中のメーリニコフ

叙述の方法／メーリニコフのフォークロリズム／ロシア民俗学の時代／メーリニコフの「民俗学」

注

参考文献

## はじめに

パーヴェル・イヴァーノヴィチ・メーリニコフ（ペンネームはアンドレイ・ペチェールスキイ）は、一九世紀ロシア文学史の中で特異な位置を占める作家である。そして、彼の代表作である長編小説『森の中で』（一八七一一七四年）は、その千ページを越える分量のみならず、描き出された世界の壮大さから見てきわめて注目すべき作品である。これまでメーリニコフという作家ならびに代表作『森の中で』に関しては、質量の点で豊富であるとは言いたいが、主に文学研究の視点に立った考察がおこなわれてきた。むしろ『森の中で』という文学作品を中心として彼の活動を一九世紀半ばから後半にかけてのロシア文学の中に位置づけることは、言うまでもなく、不可欠な作業である。

しかしながら、『森の中で』において連綿と記述されていくロシア民俗のレアリアを前にする時、通常の意味での文学研究の枠内には収まりえない問題が発生する。小説の中ではほとんど無尽蔵なまでに披露される民俗記述は、これまでにも「百科全書的」と形容されてきた。当時、ロシアの民俗学にはいまだジャンル区分もなく、明確な概念規定も存在しておらず、言うならば、制度と知のシステムとしての民俗学が確立していない段階にあった。だとすれば、メーリニコフの仕事と『森の中で』に見られる民俗記述は、この民俗学史の側面からとらえなおすことができるのではないか。別の言い方をすれば、学の成立以前の段階にあって、民俗事象にたいする新鮮な驚き、好奇心の表現こそが同時代のレアリアを介してロシアのフォークカルチャーの基本構造に接近しえる一つのテクストとなるはずである。本稿のテーマは、そこにある。ただし、紙幅の関係からここでは、メーリニコフの生涯と仕事の全体像、ならびに『森の中で』の世界の概観、そして、時代の中での彼の仕事の位置づけについて述べるにとどまる。『森の中で』のテ

クストの詳細な分析とそれにもとづく民俗学史的考察は別におこなうこととするので、本稿は、上記の問題設定にもとづいた序論となるはずである。

### 問題の所在　メーリニコフ＝ペチュールスキイへの関心

最初から結論めいた言い方をすれば、メーリニコフの『森の中で』は彼の畢生の仕事であり、文学活動と民俗研究の総決算であった。一八四〇年代に始まり、一時的な中断があったとはいえ、六〇年代の作品発表を経て七〇年代に『森の中で』によって完成されたと見てよい彼の文学活動は、文字通り、一九世紀ロシア文学の多産な黄金期の直中でおこなわれた。しかも、その一方で、同時代のロシア民俗学の開花がメーリニコフの背景として存在していた。その意味で、『森の中で』は、同時代の知的関心と時代精神をきわめて明確に反映した希有な作品として注目に値するのである。

にもかかわらず、この作品そのもの、のみならず彼の生涯、その多方面にわたる活動にたいしてまとまった紹介やモノグラフが書かれることがごくまれであったのは、まったく意外とも見える。

これには、いくつかの理由が考えられる。まず第一に、彼の役人としての経歴の問題である。後に述べるように彼は、当時のロシア社会にとって切迫した課題となっていたロシア正教内の異端としての古儀式派・旧教に関する問題の専門家として、しかも政府側の弾圧政策の実行に関わる役人として活動した。彼のこの分野の仕事にたいしては、同時代から多くの否定的見解が出され、それが現代にまで大きな影響を残していることは否めない。「保守主義者」としてのメーリニコフ像は今なお根深い。<sup>1)</sup>

第二として、メーリニコフは文学者でありながら、同時に民俗研究者のタイプに属するという点である。若い頃に始まった文学活動は彼自身の内的な契機によるというよりもむしろ、インテリゲンツィヤたることイコール作家であるといった認識が主流の時代環境のためのものであったし、一八六〇年代に再開される小説創作も周囲の勧めに応じたものだった。後者が一時的に同時代の批評家たちの注目を集めたとはいえ、彼自身が積極的に文壇に登場することはなかった。彼は生来の作家であったとは思われないのである。そしてこのことは、『森の中で』において多数のページが民俗記述に割かれていることにはっきりと示されている。自ずと彼の筆は物語の筋を脱して詳細な民俗描写へと向かっていき、部分によっては、ひとつの研究論文のごとき印象を与えるほどである。

また、「叙述が冗長」という言葉に表現されるとおり、連綿と続く地誌や儀礼、習俗などの描写、教義問答や解釈など作品の中の特徴的な叙述が一般読者の興味を引かなかったことも、彼にたいする関心が消極的であった理由である。この点は、作品の中で頻繁に用いられる俗語、方言、古語や教会スラヴ語、特殊な宗教用語とも関連するであろう。すなわち、これらの問題は、彼と同じく方言や俗語を豊富に含む作家H・C・レスコーフの作品の場合と同じく、特に外国人には容易に理解しえない、少なくとも接近しがたい作家と作品として映じてきた原因となるのである。

以上にあげたいいくつかの理由のために、現時点にいたるまで、メーリニコフに関する研究書はほとんど発表されていないし、作家論ならびに作品論としてまとまった形でのモノグラフもごくわずかしか散見できないのが現状である。しかしながら、ごく少数ではあるがメーリニコフにたいする注目と指摘はあるので、次にそれについて述べておく。

まず、メーリニコフの同時代にあっては、トルストイ、ドストエーフスキイといった巨匠たちの間にあって、メーリニコフにたいする関心はさほど大きくはないが、地味なものとしてあった。H・Γ・チュルヌイシエーフスキイ、H・A・ドブロリユーポフ、H・A・ネクラーツフ、A・И・ゲールツェンらが彼の一八六〇年代の小説にたいして

好意的な反応を残している。ただし、B・II・ダーリを除けば、文学者たちとの交流はあまり見られない。

メーリニコフから少し時代を隔てて、彼と同じネージニイ・ノヴゴロドの生まれである作家のM・ゴリーキイはメーリニコフに強い愛着を見せ、その文学に深い理解を示している。自伝『人々の中で』においてゴリーキイは「自分の魂を洗ってくれた」、言わば青春の書として、コンスタンチン・アクサーコフ『家族の日記』、II・C・ツルゲーネフ『獵人日記』と並んで、「ロシアのすぐれたエポペーヤ（叙事詩篇）」である『森の中で』をあげている。さらに彼は、ある若い友人への手紙の中で「最も豊かな語彙の持ち主」のひとりとしてレスコフ、A・II・レヴィトーフとともにメーリニコフの名前をあげ、その作品によく学ぶようにとのアドヴァイスを与えている。<sup>(2)</sup>

前世紀末から今世紀初めにかけて著された、いくつかの代表的な文学史の記述は、このゴリーキイの着眼点とはいささか質を異にしている。それらの試みは、メーリニコフを一九世紀ロシア文学史の上で位置づけようとする際に彼を「民族誌的小説」の作家、また、「民衆作家」としてとらえる反面、役人の地位を利用した民俗資料の収集と冗長な記述といった否定的側面に着目するのである。そうした試みの典型的な例はA・M・スカビチューフスキイの『最新ロシア文学史』（第四版、一九〇〇年）に見ることができる。彼の記述には妥当と思われる部分を多数見出すことができるにもかかわらず、最終的には、メーリニコフの作品を長たらしく退屈であるとして（プーシキンの「簡潔さ」を作品評価の基準の中心に据えるスカビチューフスキイとしては当然である）、文学としてはまったく否定的な評価しか与えていないのである。<sup>(3)</sup>メーリニコフを二流の作家として片づけてしまったことは、それ以後のメーリニコフ評価を固定化した点で後世への影響は大きい。

今世紀の二〇―四〇年代にあつては、メーリニコフにたいする言及はほとんど見られない。これは、役人という経歴から彼が体制側の人間だったこと、そして作品『森の中で』が全体の色彩として神話的でフォークロリシユである

ことと関連しているためであろう。その中で、言わば例外として、次にあげる二つの仕事は記憶しておくべきものである。

一つは、民俗学者F・C・ヴィノグラードフの二つの論文「メーリニコフIIペチェールスキイの長編小説『森の中で』——そのフォークロアの出典解明の試み」（一九三五年）「メーリニコフIIペチェールスキイの長編小説——そのフォークロアの出典」（一九三六年）である。ほぼ同時期に、しかも一九三〇年代半ばという時代そのものの要請とはまったく「無縁な」テーマにたいして書かれたこのモノグラフの意味は大きい。というのもこの二つの論文は、タイトルから明らかのように、『森の中で』に記されたフォークロアの出典を明らかにするだけでなく、作品の中心的なイデーにまで踏み込もうとしたからである。その点で、ヴィノグラードフの仕事は現代にあっても十分に意義を持つと言うことができるし、後に本稿でも言及する。

文学研究の面からは、B・M・エイヘンバウム の考察が注目すべきである。「M・A・クズミーンの散文について」（一九二〇年）と題する論文で彼は、ダーリ、レスコーフによって形作られる線の同一線上にメーリニコフを置いている。さらに彼は、この流れをフランス一七—一八世紀の冒険小説からアナトール・フランス、ビザンツ文学、また中世ロシアの外国小説などつなげながら、二〇世紀ではレーミゾフ、クズミンへとという流れを描こうとしているのだが、その中心的な核となるのは、やはり一九世紀半ばのロシア文学の状況であろう。すなわちエイヘンバウムによれば、ダーリ、メーリニコフ、レスコーフの流れはトルストイ、ドストエフスキイらに對置されて「若輩の系列」と呼ばれるのである。

さらにエイヘンバウムは、レスコーフについて論じながらその文学を生み出した「フィロロジ的土壤」に言及している。すなわち、ダーリ、И・П・サーハロフ、П・А・ベツソノフ、ピョートル・クレイエフスキイ、コン

スタンチン・アクサーコフなどによるフィロロジー上の膨大な研究の蓄積が「度を越えた」作家レスコーフを生み出す基礎となったことを指摘するのである。これは、そのままメーリニコフにたいしてあてはめることが可能であろう。エイヘンバーウムはメーリニコフの作品に関して直接的な考察をおこなってはいない。しかし、ダーリ、メーリニコフ、レスコーフの三人がそれぞれの作品にあって、フォークロアの知識を縦横に發揮しながら独特な文体を作り出したことを考えると、エイヘンバーウムの着眼の鋭さは注目に値しよう。<sup>(4)</sup>

こうしたエイヘンバーウムの関心と基層部分では共通する視点を持つのは、名著『ロシア・ソヴェイト文学史』(邦訳名)の著者のM・スローニムである。スローニムはメーリニコフ文学の核心を簡潔ではあるが、きわめて的確に指摘しており、今後のメーリニコフ研究にとっても見逃しえないものである。『ロシア文学史』で彼はまず、M・II・ヤクーシキン、C・B・マクシーモフ、C・B・ダニレーフスキイ、II・H・シビリヤーク、そしてメーリニコフらを「地方主義」的作家としてとらえ、さらに次のように記す。

メーリニコフの、テンポの遅い、いささか古めかしい写実主義や客観的叙述の手法、豊富で民族誌的な細部描写などは、古代の網目銅版術を思わせる。しかし自然の雄大な描写、人物の彫刻のごとき描出、表現力に富んだ香り高き言葉などはすべて、偉大な文学の伝統に従っているのである。<sup>(5)</sup>

スローニムの重点はむしろ後半部の「偉大な文学の伝統」とメーリニコフの関連にあるのだが、むしろ前半部に注目したい。これについては、後に再びとりあげる。

さらにスローニムは、メーリニコフの文学が文体と語彙の点で中世ロシアの言葉、一七世紀のロシア語、教会スラ

ヴ語、さらにレスコーフに見られる「人為的な言葉」などの数多くの要素から成立すると述べて、次のように締めくくっている。

この点で『森の中で』の数章はロシア散文の粹と考えねばならない。ロシア固有の精神を当時の文章語に吹き込もうとした一連の作家たち——レスコーフ、A・ペールイ、A・レーミゾフ——がメーリニコフを高く評価し、しばしば彼の作品を引用したのも当然であろう。<sup>(5)</sup>

これは、文学史の通史的記述の中で述べられたものであるが、きわめてすぐれた指摘である。そして、彼がとくに『森の中で』にたいして、その言葉の面で興味を示していることは注目すべきである。

近年、メーリニコフにたいする関心が起こっていることは見逃しえない。メーリニコフの八巻選集の刊行をはじめとして、『森の中で』の創作過程を中心とした作品論、さらには、例えばT・H・ホイジントン「メーリニコフとチェールスキイ、地方旧教徒のロマンサー」といったソ連・ロシアの外でのメーリニコフ論などが発表されている。その一方で、民俗学の視点からメーリニコフの作品からの引用が注目されたり、メーリニコフ自身の民俗研究も考察の対象になっている。とくに、作品『森の中で』に見出される詳細な民俗記述が関心を引いていることは本稿のテーマとも関連する。

作家Ⅱ民俗研究者としてのメーリニコフが再発見されつつある状況は、たんにメーリニコフとその作品のみに限られた問題ではない。その背景が考えられるべきであろう。それは、ごくおおざっぱに言えば、一九六〇—七〇年代にかけての時期に顕著であったある関心の高まりと動きの問題といえるものが存在したという点である。その関心とは、

フォークロア、民俗・民族的なる部分への強い興味、過去の伝統文化、さらにはロシア文化にたいするものである。むろん、そうした関心はこれまでも時代の転換点と呼びうる時期に顕在化してきたものである。例えば、一九五〇年代後半についてJ・ピリングトンが次のように書いているのは特徴的である。スターリン体制末期・終焉から「新たな」時代を迎える中で、宗教を通して当時のロシア社会の文化状況を描いたこの文章がメーリニコフに言及しているのは興味深い。

宗教にたいする新たな関心は、偶然の好奇心以上のものである。それはまず第一にスターリンの名譽を汚辱したあとに続く、若者たちの間で静かに進行しつつあったロシアの過去の再検討から発生する。宗教美術にたいして新たに与えられた高い評価、ドストエーフスキイの小説の上演、旧教徒の生活を扱ったメーリニコフ『ベチュールスキイの物語』、そして長らく禁止されていたリームスキイ『コールサコフのオペラ』『見えざる町キーテジ』——これらはすべて、「過去の遺産」を再発見しようとする若者たちの絶大なる関心にたいする反応であった。<sup>(6)</sup>

ここで言及されているメーリニコフ『ベチュールスキイの物語』とは、一九五六、五八年に出版された単行本『森の中で』と『山の上で』のことであろう。そして、リームスキイ『コールサコフのオペラ』の題名としてあげられている『見えざる町キーテジ』の伝説は、メーリニコフの『森の中で』において詳しく述べられているとおりである。

ピリングトンの文章が一九五〇年代末での「過去の歴史文化への眼差し」をめぐる状況を描いていたとすれば、一九七〇年代前後における民俗学者の関心の有り様も共通の方向をはらんでいた。そうした問題意識は、メーリニコフに関して述べられた次の言葉に見て取ることができる。

中世ロシア文化にたいする関心が特に大きなものとなった現在、メーリニコフ・ペチェールスキイの長編小説は特別の意味を持つ。すなわちそれは、後世のロシア文化とのつながりを具現し、中世の民衆的習俗を一九世紀の中に生き生きとした形で刻みつけ、同時に、鋭い社会批評的要素をもそなえている。<sup>(7)</sup>

このように、メーリニコフにたいする関心は時代の底流に存在するロシア文化への憧憬と模索の試みと深く関わってきたのである。

## 第一章 メーリニコフ・ペチェールスキイの生涯と文学活動

### 一、生まれ

メーリニコフ・ペチェールスキイの生涯は、ごくおおまかにいえば、次の四つに分かれる。すなわち、カザン大学卒業までの青年時代（一八三七年まで）、教師時代（一八四六年まで）、役人時代（一八六六年まで）、退職から死（一八六六年から八三年まで）である。彼が生きた時代は、文字通りロシア文学の黄金期にあたっており、例えばイヴァン・ツルゲーネフと生没年が同じである。もっとも、学生、教師、役人、その後の自由な余生といった全生涯を通して、いわゆる受難者としてのロシア作家の一生という印象はまったく感じられない。現在、日本のみならずロシア本国においても、メーリニコフの名前は黄金期のロシア文学者の一人としてただちに思い浮かべられることはない。

彼の作品も第一級の傑作として高い評価を受けることはなく、むしろ忘れられつつあるといつてよい。しかし、一九世紀ロシア文学史の中では、「大文学」とは別の「傍系」の流れの中で大きな位置を占めるのが作家メーリニコフであり、その意味で彼は、一九世紀半ばにおける制度と実体としてのロシア文学が成立する時代を代表する人物であった。さらに付け加えるならば、彼の生涯を一貫して流れるのは、ロシアの民俗文化にたいする、文学者であることをこえた、一種研究的な関心と情熱であった。教職であった時期、あるいはすでにそれ以前の大学生時代に生じたと思われるロシア民衆文化への強い関心は、彼自身の調査・研究、またダーリをはじめとした同時代の多くのインテリゲンツィヤとの交流、さらに同時期の民俗学研究成果の吸収を通して、年とともに増大していったのであり、死の時まで決して消滅するものではなかった。そして、ロシア民俗にたいする彼の情熱と関心の最大の開花が長編小説『森の中で』なのである。

パーヴェル・イヴァーノヴィチ・メーリニコフは一八一八年一〇月二十五日（旧暦）にニージニイ・ニーヴゴロドで生まれた。もっとも、この生年には異論もある。作家自身の手になる未完の自伝に一八一九年一〇月二二日と記されているのを根拠とするのである。しかし、II・A・マールコフはメーリニコフの洗礼簿を点検するなど精密な調査をおこなって、その成果として一九五八年に発表された彼の小論文以後、各種の百科辞典、文学辞典は一八一八年を採用している。

メーリニコフが生まれた町であるニージニイ・ニーヴゴロドは一時期こそ離れることはあったものの、ヴラジミール・ダーリとの有名な交流をはじめとしてメーリニコフの活動の多くの部分がここで展開した。その意味で文字通り、彼の人生そのものとなった町である。『森の中で』においても、作品の主要な舞台であるザヴォールジエ（奥ヴォーラガ地方）の森の中から出てきた青年アレクセイが、世間知らずの田舎者から金持ちの商人へと成り上がっていく

様子が描かれる際に、その背景として、この町を流れるヴォールガ河、オカー川、そこを航行する船、町の光景そのもの、町の名高い定期市とそこに集まる人々について詳細に記述される(第二部、三、一四—一五章その他)。そこには、作者のこの郷里の町と土地にたいする熱い思いがこめられていると考えて間違いない。また、同じくこの町の出身者である作家のゴーリキイがメーリニコフにたいして高い評価を与え、深い愛着を示すのも案外とこの同郷の誼が理由となつているのかもしれない。

メーリニコフの家は、家族内の言い伝えによれば、古くはドン河地方に発するザポロージェ自由人の末裔であり、「純粹にロシアの血統」を誇る一族であつたという。一七世紀後半のフォードル三世の時代に歴史上に登場した、さして裕福ではない貴族の家系であつた。作家の父であるイヴァン・イヴァーノヴィチ(一七八八—一八三七年)はナポレオンとの戦争に参加した経験を持ち、その後はニージニイ・ニーヴゴロドで憲兵隊長を勤めた人物である。一八一八年に彼は、ニージニイ・ニーヴゴロドの地主で郡警察署長の娘のアンナ・パーヴロヴナ(一七九〇—一八三五年)と結婚し、二人の長男として生まれた将来の息子は母方の祖父の名前をとってパーヴェルと名付けられた。この長男の誕生後、父親は退職し、ニージニイ・ニーヴゴロド北東の郡都セミョーノフの郡裁判所の判事となつた。家族は、パーヴェルの下に弟と妹が二人ずついて、それほど豊かではなかつた。

当時の作家をはじめとするインテリゲンツィヤの例にもれることなく、長男のパーヴェルの語る昔話を聞きながら成長していった。その一方で、母親の影響によって文学や歴史に興味を示し、特に母方の祖父の膨大な蔵書に触れることで旺盛な読書欲を満たしていた。さらには、家に入入りする多数の庶民の生きた言葉と気質に接して強い印象を持ったことが彼の回想記に書かれている。特に注目すべきなのは、「旧教徒たちの暮らしの心臓部」(M・プリーシヴィン)と呼ばれる森の町セミョーノフで幼年時代を過ごしたこと、そして、旧教徒の僧院や草庵が多数点在す

るケールジュニ、チュエルノラーメニといった森の中で過ごすことが多かったことである。子供の頃から彼は、旧教・古儀式派の雰囲気をごく身近かに、自然に感じていたのである。

ニージニイ・ニーヴゴロドの男子ギムナジウムで学び（一八二九―一三四年）、一五歳でそこを卒業したメーリニコフは、当時、著名な数学者であるロバチェーフスキイが学長だったカザン大学文学部に入学した。モスクワ大学への進学は両親の反対でできなかった。大学在学中にその両親を相次いで失っている。

すでに述べたように、彼の読書にたいする意欲は、読書好きかつ歴史好きであった祖父の影響もあって、幼い頃から非常に強かった。早くからプーシキン、デーリヴィク、ジュコーフスキイ、バラトイーンスキイなどの作品を好んで読んでいた。三人称で書かれた自伝によれば、プーシキンの詩を誦んじ、一二歳の時にはプーシキンの『ポルタヴァ』の全文、『エヴゲーニイ・オネーギン』の多くの部分を暗唱していた。<sup>(8)</sup> フランス語も家庭教師によって厳しく鍛えられ、一四歳でヴォルテールを読み、ベランジュの詩を誦んじるまでになっていた。また、友人たちとともに史劇やオーゼロフの悲劇を演出、上演したという。こうした多方面にわたる興味は大学入学後も持続し、文学、歴史、言語学などの分野へと自分の関心を広げていくことになった。特に、カザン大学という地理的ロケーションから派生した雰囲気に刺激を受けたためであろう、東方の言語にも強い興味を抱き、ペルシャ語、アラビア語、モンゴル語なども学んでいる。

メーリニコフの教え子となった歴史家のM・Π・ベストウージェフ・リューミンは、メーリニコフにたいするネクロロジで、大学時代の「彼は先生には恵まれなかったが、友人には恵まれていた」と記している。事実、後に東洋学者となるB・Π・ヴァシーリエフ、A・И・アルテミエフ、統計学者のK・O・ドーリニックは大学時代にメーリニコフに出会い、生涯の友となった人々である。しかしながら、メーリニコフ自身の発言や仕事をふりかえってみる

ならば、大学時代の教師として彼に大きな影響を与えた人物としてスロフツォーフの名前を見逃すわけにはいかない。グリゴリーイ・ステパーノヴィチ・スロフツォーフは、当時、カザン大学でロシア文学と美学の講座を担当していた人物である。一七八六年生まれの彼は、ヴォーログダの神学校ならびにトロイツェルギーエフ神学校で学んだ後、ヴォーログダ神学校、カルーガ神学校で修辞学、フランス語、ギリシャ語を教えた。ナポレオン戦争後のロシア社会で広まっていた神秘主義の影響下にあった彼は、一八二〇年には神学校をはじめとした宗教界から追われて、当時、カザン大学を一種の中世的なカトリック修道院としようとしていたマグニーツキイの庇護の下になる。一八二二年四月からは特任教授、二九年からは正教授となり、その後は、一八四〇年に退職するまで政治倫理学部長、文学部長を歴任した。根本的には保守主義者であったスロフツォーフだが、当時のデカブリスト事件前後の状況下、時代精神の点で彼も時代のインテリゲンツィヤの一人であった。彼は、デカブリスト事件後の新しい文学の理解者として、また、時代の閉塞状況下の典型的な知識人の一人として、学生たちに現代文学との出会いを熱心に教えた。プーシキンにたいする熱烈な傾倒者であった彼は、講義の場でプーシキンの詩を朗読し、その死について知らせ、その死に捧げられたレールモンツォフの「詩人の死」を読み上げた。その時の様子は、メーリニコフの回想録に詳細に熱をこめて描かれているが、それはそのままメーリニコフ自身の青春の一ページを語るものである。またスロフツォーフは、ダリーの有名な辞書の出版より以前に『ロシア語方言集』の必要性を強く訴え、大学を通してそのプランを具体化しようとしていたという。この点で、彼がメーリニコフにたいして民衆の言葉や口承文学への関心を呼び覚ましたことは疑いない。メーリニコフは、彼自身のロシア民俗研究に多大な影響を与えたであろうこの教師について次のように記している。

民衆の言葉、民衆の創作、歌謡、昔話、諺について十分に知りぬいていたスロフツォーフは、そのようなものの中には、本当のロシア文章語にとつて、決して損なわれることのない純粹な源が存在するのだ、とつねに語っていた。<sup>(10)</sup>

現在ならば一般的には「標準語」と訳されるものをあえて直訳して「文章語」としたことによって、当時の言語状況がはっきりと物語られることとなる。一八三〇年代は、当時のすべての作家にとつては最大の過渡期だった。すなわち、詩から散文への移行の時期にあたっていたのであり、その移行に際して文章語のモデルたるべく「純粹な源」として選択されたのは、それ以前にはほとんど視野に入ることのなかった、特に昔話をはじめとした口承文学の作品だった。むろん、そうした選択はただちに社会全体の共有とはならず、プーシキンをはじめとした少数の人々の実験によってなされようとしていたのだが。ここに引いたメーリニコフの一文は、そうした当時のインテリゲンツィヤの認識が確実に存在し、広がっていたことを明確に示すものである。

先に言及したメーリニコフの東方にたいする関心の方向が「ロシアへと生まれ変わった」（メーリニコフ）という契機を、彼自身は「人間のオーガニズムの運命論」によって説明するが、その一端は、もしかすると、この教師の影響にあるかもしれない。

## 二、大学卒業から「ペチュールスキイ」誕生まで

一八三七年に大学を卒業したメーリニコフは、その才能をかわれてスラヴ語講座の開設準備のために大学に残り、また、外国への派遣も計画されていた。しかし、仲間との大酒飲みという「若気の至り」がもとで、そうした将来計

画はすべて水泡に帰した。ただし、このことにたいして彼の自伝は沈黙するのみであり、このように記したのはブックハウス百科事典のC・A・ヴェンゲロフの記述による。しかも、ベルミ島の僻地のシャードリンスクに教師として護衛兵付きで派遣されている。その後ベルミに戻り、ギムナジウムの教師として歴史、地理、統計を教えている（一八三八―三九年）。

この時代の活動としてふれておくべきなのは、ウラル地方への旅行とその際の観察をまとめた成果論文の執筆である。すでに述べたとおり、大学在学時に芽生えたロシア民俗への関心は、この旅行によって実地に検証されることとなった。メリニコフは休暇を利用して、タムボフ、ニージニイ・ノヴゴロド、ベルミといった地域を歩き回った。特に農村を丹念に巡って、「書齋のやわらかなソファなどには座ることなく、農民小屋の板寝床（ポラーチ）に横になって」農民や働く人々の生活、民衆の俗語、フォークロアにじかに触れた。その旅行の記録は、『タムボフ県からシベリアへの旅覚書』と題されて雑誌「祖国雑記」その他に発表されたが（全九篇、一八三九―四二年）、そこには、訪問した土地の自然、経済、住民についての報告にはじまって土地ごとの習俗、言い伝えまでが道中の見聞や印象に交えて記されている。この当時、「モスクワ通信」「祖国雑記」「モスクワ人」などといった名だたる総合雑誌の紙面には、ロシアの地方の各地の様子を記したルポルタージュがロマン主義ないしはエキゾチズムの影響を受けながらも次々と発表されていた。辺境のシベリア地域の地誌・風俗の紹介も人気があり、メリニコフのこの旅行記もそうしたものの一つとして評判を博したのであり、その結果として、彼の名前が中央に知られるきっかけとなった。ホイジングトンは、この旅行記が文体・語り・対象などの点でメリニコフにとって基本的な問題提起がなされた「文学の実験室」であり、そこには人類学者のアプローチが見られる、と述べる<sup>(1)</sup>。その指摘には誇張もあるが、メリニコフの処女作に大きな意味を認めることに間違いはなく、基本的には正確な認識である。また、シベリア研究の視点から

みても、「旅覚書」は一九世紀前半の貴重な仕事として現在もなお民族学史的意義を失っていないとされている。<sup>(12)</sup>

メーリニコフは、また、同じくこの時期に作家としてもスタートしようとして、ゴーゴリの文体を真似た短編小説二篇を発表している（一八四〇年）。ただし、この処女作はゴーゴリの場合と同様にまったくの不評に終わり、おかげで彼はその後一二年ほどの期間は文学作品の執筆を断念することになった。

一九三九年秋、彼は故郷の町ニージニイ・ノーヴゴロドに戻り、ギムナジウムの歴史の教師となった。その後の六年を彼はこの町で教師として暮らすことになるが、ゴーゴリがツルゲーネフにとって魅力を感じさせない教師であったのと同じく、教師としてのメーリニコフは学生にとってはあまり満足を与える存在ではなかったようである。しかしながらヴェンゲーロフによれば、知識にたいする食欲さと歴史への愛情の点で、メーリニコフはC・B・エシェーフスキイとベストウーージェフハリューミンという二人の優れた歴史家を生み出したのであり、そのことはメーリニコフの名譽のために忘れられるべきではない。一八四〇年に彼の生徒となったベストウーージェフハリューミンは、メーリニコフは「教育者ではなかったが、学ぼうとする者にとっては有益だった」と記している。

この時期の彼は、個人生活の上では恵まれなかった。一八四一年に結婚した病弱の妻リージャ・ニコラーエヴナが一八四八年に七人の子供を残して亡くなったほか、経済的にも苦しい状態が続いた。しかしながら、こうした逆境にもかかわらず、一八四〇年代は彼の研究活動が本格的に開始される時期として特筆されなければならない。すなわち、一八四一年に考古学協会の通信会員に任命されたのをはじめとして、一八四六年から帝室ロシア地理学協会員、一八四七年から農業協会の通信会員となつて、文字通り研究者としての彼のエネルギーがフル回転することとなった。ここにいたって、彼はロシア中世史、郷土史・誌、ラスコール研究に没頭するのである。

そうした研究の成果は、一八四五年以降、彼が編集者として働くことになった「ニージニイ・ノーヴゴロド県報」

(一八三八年から発行、週二回)に発表された。この「県報」は県知事M・A・ウルーソフの発案により発行されたもので、彼の側近にいたメーリニコフをはじめ、M・B・アヴデーエフ、B・A・ソログープがその編集に参加していた。その雑報欄には、ニージニイ・ノーヴゴロド官公庁のアルヒーフから取捨選択された多数の歴史的・民族学的資料が発表されていた。そのことのために「ニージニイ・ノーヴゴロド県報」は、当時広く知られていたカザン、ヴラジミール、ヴォローネジで発行されていた県報と肩を並べるまでになり、「ヴォールガ河流域の文化生活の中で注目すべき現象となった<sup>(19)</sup>」という。そして、その紙面に発表された資料や歴史論文の大部分が、雑報欄担当のメーリニコフの手になっていた。彼は一八五〇年までこの県報の編集に携わったが、指摘しておくべきなのは、その最後の年に掲載された論文「ニジェゴロドのコンツェルトについて」の筆者名として、彼の終生のペンネームとなったアンドレイ・ペチェールスキイの名前が登場することである。このペンネーム誕生にまつわるエピソードについては後に述べる。

「ニージニイ・ノーヴゴロド県報」のほか、雑誌「祖国雜記」「モスクワ人」などに彼は次々と資料探索の成果を表していくこととなった。ロシア郷土史(誌)家、民俗文化の研究者としてのメーリニコフの誕生である。

ところで、当時のニージニイ・ノーヴゴロドはヴォールガ河をさんだ対岸の土地で年一回開催される定期市によってロシアのみならず、広くヨーロッパ、アジアで知られていた。メーリニコフ自身、また彼の息子もこの定期市の歴史に関するモノグラフを残しているが、それによれば、一九世紀半ばにはロシア全域で開かれていた四七六〇の定期市の中で、ニージニイのそれは最大規模を誇っていたという。公式上は毎年七月一日から八月一日までの一ヵ月間にわたっておこなわれたその定期市については、ダーリの『ロシア人の諺』にも「七月二五日は聖マカリーの日——ニージニイ・ノーヴゴロド定期市の名の日」とあるとおりである。

この定期市がたんに商品の移動と売り買いのための場にとどまらなかったのはいうまでもない。言わば祝祭への参加と情報の交換のために多くの人々が集まったが、注目したいのは多数のインテリゲンツィヤが到来したことである。A・H・オストロフスキ、ネクラソフ、H・H・パナーエフ、マクシーモフといった作家たち、歴史家のM・Π・ポゴージン、民俗学者のヤクシキンといった人々がこの定期市を訪れたが、この中でネクラソフ、パナーエフ、ポゴージンはメーリニコフが記したこの町に関する論文をガイドブックとしていたという。また、一八四一年にこの町を訪れてメーリニコフと知り合ったポゴージンは、遺跡や市をともに見て回り、資料を送ってくれるようメーリニコフに依頼している。このようにメーリニコフはこの町と定期市の訪問者にとって文字通り直接、間接の案内役となっていたのである。<sup>(14)</sup> その一方で彼は、市の管轄者で町でも有数の教養人であったH・H・トルストイ伯爵と知己を得て、彼を介して一般には手に入れがたい旧教徒関連の古文書を入手し、また、旧教徒たちと交流した。メーリニコフはこの時期の自分を回想して次のように述べている。

一八四七年まで、私はニージニイ・ノーヴゴロドに住み、ロシア史を学びながらラスコールとその教徒の研究にとりかかった。二つの事情が私の仕事の手助けとなった。すなわち、多数のラスコーリニキが住むニージニイ・ノーヴゴロドのザヴォールジエ（奥ヴォールガ河地域）周辺の調査旅行と、そしてニージニイ・ノーヴゴロド定期市における書籍商との交流である。<sup>(15)</sup>

このほかに一八四〇年代における彼の研究活動にはロシア・スラヴの神話を中心とした古代の文化にたいする憧憬ないしは関心があり、そのことは書簡によって検証できるものである。さらには、そのことをもってメーリニコフを

「スラヴ派への共鳴者」とする考えもあるが、その点はいまだ十分に確証を得るに至っていない。ロシア・スラヴの神話にたいする彼の関心がどこから生まれたのかという問題は、『森の中で』の世界を理解する際にきわめて重要なテーマであるにもかかわらず、メーリニコフ自身に関する資料、ならびに一九世紀前半におけるロシア神話研究に関する資料の乏しいことのために解明できないのが現状である。『森の中で』における民俗記述の研究史的源泉を調査してすぐれたモノグラフを残したヴィノグラドフは、この点に関して一九世紀半ばまでの神話学的記述をあげている。だが、それは点数としてごく少数であり、内容面でもきわめて概略的のものにとどまっており、しかもメーリニコフ自身との関連はまったく指摘されていない。

しかしながら、一八四〇年代までに明らかにになっていたロシア神話にたいする関心の萌芽が、後世の『森の中で』における壮大な神話世界への叙述へとつながることは明らかである。そのためには、「神話学派」の代表者であったA・H・アフナーシェフの著書に接する一八六〇年代後半まで待たなければならなかった。

### 三、役人として

一八四六年にメーリニコフは教職を捨てて、ニージニイ・ノヴゴロド県知事ウルソフ付きの特別任務職に就いている。その理由など詳しい経緯は不明である。その職には一八四七年から三年間とどまり、さらには一八五〇年から内務省に勤務、五五年からはその特別職の官吏として働くこととなった。したがって、教職をやめてから数えれば一八六六年に退職するまでのほぼ二〇年間を彼は役人として過ごしたのである。しかも特別職という任務の内容は、彼の歴史に関する知識、特にラスコールに関する知識の豊かさ故に、大いに期待されたものであった。一九世紀半ばのロシア社会にとってラスコール問題は焦眉の課題であったからである。

メーリニコフは子供時代から旧教徒たちと触れ合い、頻繁にその僧院を訪ね、彼らの生活や風習を肌で知る機会に恵まれていた。母の死後に領地を得たニージニイ・ノヴゴロド県セミョーノフ郡をはじめとして、彼の生まれ育ったニージニイ・ノヴゴロド周辺は旧教徒運動の指導者であったII・アヴァクームの生まれたことに象徴されるように、古くから旧教徒が多く住む地域として知られていた。このことは、メーリニコフ自身が参加し指揮を取った統計調査の報告によっても明らかである。彼の論文「ラスコーリニキの人数」によれば、ニージニイ・ノヴゴロド県では人口一六万人の中、一五パーセントの一七万人が旧教徒であったという<sup>(16)</sup>。

すでに述べたとおり、メーリニコフは旧教徒の友人や定期市の書籍商人などを通じて、旧教の教義上の著作をはじめとして古文書や手書き本、さらにはメモのようなものまで手に入れるなど旧教の状況に深く通じていた。その博識ぶりは、旧教徒内の最高の識者とも論争できるほどであったとまで言われており、一八四〇年代末には「ラスコーリ問題」で最も著名な事情通の一人と見なされていたのである。彼の精通ぶりについて、作家のレスコーフは次のように書く。

実に長い間、メーリニコフはラスコーリ研究とアポクリフ文学の上で私の指導者であった。そして私の初期の仕事に見られるラスコーリの生活習俗面に関する誤謬を訂正したのだった。私は、ラスコーリにたいするメーリニコフの見方を確信をもって受入れた。なぜならば、今は亡きパーヴェル・イヴァーノヴィチの見解は、私の理解によれば、もっとも信頼のおける正しいものであったからである<sup>(17)</sup>。

こうした造詣の深さのために彼は、ニコライ一世末期に第一級のラスコーリ通として政治世界の中枢へと招き入れ

られたのだった。メーリニコフが自分に課された公務を忠実に遂行したことは彼自身も認めるとおりであり、しかも、ラスコーリニキの壊滅をもくろんでいた上層権力の意向を彼は無慈悲なまでに実行しようとした。

メーリニコフはラスコーリニキが原因となってロシアに政治的不安がもたらされると考えていた。そして、一八四〇年代末に自身の公務開始にあたって、ラスコーリニキを衰退させる目的で次のような過酷な計画を提案している。

- 一、ラスコーリニキと正教徒が一緒に住む地域では、前者を兵隊にすること
- 二、正教徒でない司祭、逃亡司祭、ラスコーリニキの教師や両親といった人々の祝福を受けた結婚によって生まれた子供は、強制兵役として軍隊や軍関係の役所に送ること<sup>(18)</sup>

彼の内心には、少年時代から親しく接した旧教徒たち自身と、彼らの習俗や習慣にたいする愛着があったと考えるのが自然であろう。そのことが、旧教徒のみならず、ロシアの文化と歴史、地方史、考古学、民俗学への関心として大きく展開していった源泉であったと言える。しかしながら他方で、役人としての彼はそうしたいわば個人的契機や感情を表面に出すことなく、旧教徒弾圧者としての任務を押し進めていった。

それ故に、旧教徒の間だけではなく、ロシア社会の広範な部分でメーリニコフにたいする反感が生まれていったのは十分に想像できる。レスコーフによれば、当時、メーリニコフについて「まるで狼のようだ」という風評があったというし、彼自身がラスコール・フォークロアのヒーローとして「悪魔と連帯し、壁のむこうにある物を見抜ける」人物との伝説も生まれていた。したがって、H・A・ヤンチュークは中世ロシアにたいするメーリニコフの豊富な学識を高く評価しながらも、その文学活動について語る時、次のように付け加えるのを忘れないのである。「それは

（メーリニコフの作品——引用者）文学的才能を持った予審判事、あるいは特別任務を帯びた役人の創作である」。さらに、ヤンチュークは続ける。

この興味を引く語り手の背後には、彼にとってあらゆる可能な手段を使ってラスコールの生活の内情のすべてを嗅ぎ出すように、という秘密任務を任された内務省の役人が立っていることを忘れてはならない。<sup>(18)</sup>

しかし、旧教徒にたいして取られた彼の仮借なき態度も一八五〇年代末にかけて変化していった。すなわち、一八六一年の農奴解放をはじめとする大改革を目前としたリベラリズムの潮流の中、メーリニコフの旧教徒観は急激に転換していった。彼らのことを「有益なる市民」と呼んだことに示されるとおり、以前に比べてはるかに穩健で、寛容なものとなり、時には正反対のものまでが見られるのである。

ラスコーリニキはそれ自身の中に、国家や社会秩序にとって何ら危険なものではなかったし、今もない。彼らの市民権にたいする二〇〇年にわたる圧迫と制限は、まったく余計なものであり、有害でさえあった。<sup>(19)</sup>

メーリニコフは政府にたいして、旧教徒に寛大な態度を取るように働きかけるまでになっている。一八六六年に内務省宛に書かれた書簡の中には、教育を受けた旧教徒が我々の生活にたいして新たな要素をもたらす存在であること、また、我々が忘れ去った「いにしえ」のものを与えてくれる人々であると記され、さらに、「未来のロシアの主なる岩は古儀式派の中にこそある」とまで述べる。<sup>(20)</sup>そして、聖職者の無知こそがラスコールの原因であり、旧教徒を真に

なくすためには大衆の啓蒙こそが必要であり、古儀式派教徒にたいして完全な市民権を与えるようにとメーリニコフは提起するのである。

このようなメーリニコフの旧教徒観の転換については、彼は研究による情報の増加のためとするが、同時代でもさまざまな噂や憶測が流れたし、その是非や理由にたいして研究者の意見も分かれた。呵責なき役人と穏健な啓蒙主義者、といった形でメーリニコフの二面性を指摘するのが一般的である。これにたいして、ヴェンゲーロフは事情ははるかに単純であったとする。すなわち、彼は「メーリニコフの体制内での生活には、彼自身の確固たる見解といったものがなく、彼はただ支配的潮流に身を任せていたにすぎない」とするのであり、それが基本的に正しいと思われる。また、作家のM・E・サルトイコーフシチェドリーンも、役人としての活動をもってメーリニコフを「卑劣漢」と呼びながら、「たとえそうだとしても、悪意でもってそうしたのではなく、命令に従ったまでである」としているのも、同様の意味であろう。旧教徒にたいする熱烈な興味と愛着、ラスコーリニキへの迫害計画の作成、彼らにたいする啓蒙主義者としての寛容、といった時代による矛盾とも映る変化は、彼がリアル・ポリティカルな状況に通じた官僚としての資質の持ち主ではなく、むしろ研究者として、あるいは文学者としての才に沿っただけの結果と考えられる。

#### 四、同時期の文学活動と民俗研究

次に、役人時代における彼の文学活動と民俗研究について述べる。先にふれたように、彼は一八四〇年にゴーゴリの作品を模倣した短編小説、その他に詩などを発表したが、失敗に終わり、その後は文学活動を停止していた。しかし、一八五〇年代になって彼は、ダーリの強い影響と勧めもあって一〇年以上にわたる沈黙を破り小説家としての再

スタートを切ったのだった。

その当時、ダーリは、作家として、民俗学者として、また方言学者として幅広い活動をしていた。彼の作家としての活動開始は、一八三〇年代、ロシア文学史上で詩から散文へと移行がおこなわれた時期のことである。すなわち彼は『昔話集』（一八三二年）によってデビューし、短編小説、さらにオーチュルク（ルポルタージュ）に通ずる「生理学的」作品を発表した。そうした彼が、一九世紀半ばにかけてのロシア文学の大展開を眼前にして、文学活動を「断念」してロシア民俗・ロシア語研究へと転じていったこの意味はきわめて大きい。それは、たんに彼自身の才能や資質の問題に収まるものでなく、彼個人の選択の問題にもとまらぬはずである。それは、いわゆる文学と言葉・民俗との両者を通底する問題であり、ロシア文学史におけるフィロロギズムとその伝統、あるいは、フォークロリズムの問題である。

一九世紀半ばにおけるロシア民俗学の創成期にあって、アカデミズム内部に位置する学者としてでなく、いわばアマチュアの研究者たちが果たした役割は計り知れぬほど大きなものがあつた（そのことは、そのままロシア民俗学そのものの特徴的現象となつた）。そうした中でも、医者であり、動物学、植物学にも造詣の深かつたダーリの存在は群を抜いていた。一八四〇年代には、庶民の生活・習俗・言葉など民衆文化にたいする知識の豊富さで彼の名声はすでに定まっていた観がある。ダーリは一八四五年に開設された帝室ロシア地理学協会の創設メンバーのひとりであつたし、なによりも彼の畢生の仕事として、ロシア文化研究の画期となつた二つの仕事がこの四〇年代に開始されていゝた。その二つの仕事とは、言うまでもなく、二〇万語を収めた『生きた大ロシア語辞典』（一八六三―一八六六年）と三万項目からなる『ロシア人の諺』（一八六二年）<sup>(21)</sup>である。

ダーリがメーリニコフと出会つたのは一八四〇年代後半である。最初の出会いは一八四九年とも、また、ベストウ

ージェフ・リューミンは一八四五年にペテルブルグにおいて、とするが、最終的には不明である。一八四一年から首都ペテルブルグで内務省の特別官房の長官職に就いていたダーリは、一八四九年にその職を退き、その後の一〇年ほどをニージニイ・ノヴゴロドで皇室領管理局長官として勤務している。そしてその時期にメーリニコフとダーリは、この町の同じペチュールスカヤ通りではんの至近距離に居を構えることになるのである。

先に述べたように、ニージニイ・ノヴゴロドの町はロシア第一の定期市で知られていた。当然のことながら、ダーリもそこに赴くこととなり、この町に住んだ一〇年の間、一度も欠かすことなく市に出掛けたという。むろん、その目的は「カーニヴァルの世界」としての市に見出される「多くの民族と言葉の『バビロンのごとき』混淆、果てしなきお喋り、口論、叫び声、罵声、地口、小話、さまざまな方言、衣服や商品、色彩の絶え間なき変化、生命の激しい沸騰」を観察し、記録するためであった。特にニージニイ・ノヴゴロド周辺は、ヴォールガ河中流地域の多民族が接触する場所として、モルドヴァ、マリなどのフィン語族、チュヴァシ、タタールなどのチュルク語族の住民が多数住み、大きな意味でヨーロッパとアジアの接触点であった。したがってダーリの眼前には、「突如、蘇った辞書」のごとき光景が現出したはずである。言語学者や民俗学者・民族学者にとってはこの上なく狂喜をもたらしたのである。うその場について、ダーリの伝記作者は次のように描きます。

背の高いダーリの姿があちこちでちらついていた。彼はこの巨大な人の海を愛していた。というのも、彼は人が好きだったからだ。どうして愛さずにいられようか。そこに、農夫が草履を履き、手織りの粗いラシャの上着を着て立っている。なあ、その人、寄っていけよ、といった言葉。すると、すぐさま、鉛筆を手にして書き留める。ダーリは何一つ思いわずらうことなしに、彼の手元には、洒落や諺、慣用句が山ほど溜まっていく。

定期市は四〇日間続くが、この間、ヴラジーミル・イヴァーノヴィチ（ダーリのこと——引用者）は、言葉と昔話、歌謡、そして民俗版画を「漁りに」出掛けていった。<sup>(22)</sup>

こうした環境下にダーリとメーリニコフはともに研究に没頭していった。メーリニコフは自由な時間のほとんどをダーリの家で過ごし、年代記や中世文学を読み、古文書などの資料整理に打ち込んだ。また、一八五二年から翌年にかけてメーリニコフがニージニイ・ノーヴゴロド県内の三七〇〇にもおよぶ地点を巡って資料収集をおこなった際に、ダーリは彼に方言の採録を依頼している。したがって、ダーリの『生きた大ロシア語辞典』にはメーリニコフが集めた資料が収められておりこの辞書作成・編纂にメーリニコフが参加したと考えるのが自然である。事実、メーリニコフの名前はダーリの辞書の序文に記憶さるべき協力者としてあがっている（ただし、辞書の内容と規模からすれば多数の協力者がいたはずだが、そのメンバーの顔ぶれはほとんど窺い知ることができない。名前のあがっているのは、オレンブルグの陸軍幼年学校視学官のA・H・チャニコフとメーリニコフのわずか二人である）。

文字通り、日夜研究をともしる中で、メーリニコフがダーリのことを「ロシア文学の分野における愛すべき師にして指導者」と呼んでいるとおり、彼から大きな影響を受けたことは当然であろう。そして、その影響はメーリニコフの文学活動にまで及ぶことになった。メーリニコフの作家としてのペンネームである「アンドレイ・ベチュールスキイ」がダーリによって与えられ、それがそのまま作家メーリニコフの再出発を意味することになったのである。ペンネーム決定のエピソードは、この二人のきわめて自由で、ざっくばらんな間柄を示すものとして興味深い。これを書き留めたのはメーリニコフの息子であり、若干の加工や誇張があるかもしれないが、それでも雰囲気を知るには十分である。

ある時、パーヴェル・イヴァーノヴィチが彼（ダーリのこと）のもとに自分の小説を携えてやって来た。ダーリは読み終えて、

「素晴らしい。仕上げで出版したらいい」

「何だって？ ヴラジーミル・イヴァーノヴィチ、僕は自分の姓を書く気はない」

「だったら、ペンネームを使えばいい」

「はたして考えつくものかな！ だって、君はルガーニで生まれたからカザーク・ルガンスキイ（ダーリのペンネーム）。君は考える必要がなかったのだから。ところが、僕のはどう？」

「大切なのは賢ぶらないことさ。ロシアでは、名前はどれも平凡でなければならぬし、ロシア人の耳に分からなければいけない。今、どこに住んでいるんだ？」

「ペチュールスカヤ通り、アンドレーエフの家だ」

「それなら、これが君のペンネームさ。アンドレイ・ペチュールスキイ！」<sup>(23)</sup>

ダーリは自分の弟子の中にロシアの歴史をはじめとして民衆の言葉とフォークロアに関する豊富な知識と研究者としての才能を認めただけばかりではなく、小説家としての能力と、そして生き生きとした表現力に溢れた言葉の体現者を見て取ったのである。こうして、ダーリの勧めによってメリニコフの再出発の作品『クラシーリニコフ家の人々』（一八五二年）が発表されることになるが、ダーリの存在なしには、メリニコフのその後の文学創造と民俗研究、そしてその両者が一つとなって生まれた作品『森の中で』へと至る道も切り開かれなかったと考えるのは誤りではな

いだろう。役人としてのメーリニコフは、「ダーリの家から、ロシア全土で知られた作家アンドレイ・メーリニコフ<sup>(24)</sup>ペチュールスキイとなった」のである。

『クラシーリニコフ家の人々』は、一八五二年に雑誌「モスクワ人」に掲載された。この作品は俗語が多数使用されるなど多くの点でダーリの小説に似たところがあり、事実、発表以前にダーリのサロンで読み上げられたものだった。署名は、もちろんアンドレイ・ペチュールスキイとされ、ダーリに捧げられていた。この作品の評判はかなり高いものだった。

ベストウージェフルリユーミンは、この作品とほぼ同時代に出現した一連の作品（ダーリのオーチュルク、B・グリゴロヴィチの小説、オストロフスキイの喜劇、そしてツルゲーネフの『獵人日記』）との関連を指摘しているが、それは興味深い。その指摘によれば、それまでペテルブルグやモスクワを中心とした都市を舞台に、貴族ないしは役人を主人公として彼らの生活を描いてきた文学が、一八四〇年代から五〇年代にかけて、農村世界を背景として農民をはじめとした民衆を描く小説へと変貌していったのがこの時代の文学の新たな有り様であった。そこにあつては、農民の生活あるいは下層民衆・庶民の生をテーマとした「民衆小説」народный романとはいかにあるべきか、が問われたのであり、その課題は一八五〇年代から六〇年代へとさらに継承されていくものだった。しかもこの課題は、テーマだけでなく、表現手法やジャンルそのものにも関わる問題であつた。

こうした状況の中で、いわば「大文学」とは別の形で、相互に影響しあう幾つかの流れが生まれていった。例えば、グレープ・ウスペーンスキイに代表される農民風俗のオーチュルク、ダニレーフスキイ、マクシーモフ、A・A・スレプツォーフ、Φ・M・レシヨートニコフなどの「民族誌的小説」этнографический роман、さらには、ダーリからレスコーフへと受け継がれた「芸術的フィロロギズム」であつた。『クラシーリニコフ家の人々』以降のメーリニ

コフの作品も、こうした文学史的関連と風土の中でこそとらえられるものである。

『クラシーリニコフ家の人々』の発表後、メーリニコフは五年ほど再び沈黙する。これについて彼自身は「やりかけの仕事が忙しかったため」、「自分の力量への不信のため」と述べている。その後メーリニコフは、五〇年代半ばのネクラソフの詩「詩人と市民」、シCHEDリーンの『県のオーチュルク』（ともに一八五六年）といった時代を象徴する作品が生まれる中で、再び筆を執る。一八五七年から翌年、また一八六〇年にかけて、雑誌「ロシア報知」を中心に続々と中編小説を発表している。主要なものをあげるならば、『ポヤールコフ』（チュルヌィシェーフスキイによってシCHEDリーンの『県のオーチュルク』と比較して、より才能あるとされ、一八五七年の文学作品中で最良のもの<sup>(2)</sup>と絶賛された）、『古き時代』（ドブロリユーボフがコンスタンチン・アクサーコフの『家族の記録』になぞらえて、その農奴制の無法ぶりをめぐる描写を評価し、また、メーリニコフ自身も一八六〇年以前の自身の作品で最高のもものとした）、その他、ゲールツェンによって技巧の素晴らしさが指摘された『グリーシャ』、『片田舎』、『名の日のピローク』などである。これら一連の小説をまとめて作品集を出版しようとする試みが一八五八年になされたが、これは検閲によって許可されなかった。そのことは、先に紹介したチュルヌィシェーフスキイをはじめとした急進的な批評家たちの評によって、また、メーリニコフ自身が一八五〇年代後半にはリベラルな啓蒙主義者へと転じていったことによって説明されるだろう。出版計画はようやく一八七六年になって『アンドレイ・ペチェールスキイ短編集』として実現した。また、一八五六年には家族とともにペテルブルグに引っ越し、アポロン・マリーコフらと交際をしている。

さらにここで付け加えておかねばならないのは、彼が友人のアルテミエフともども編集に携わっていた日刊新聞「ロシア日誌」に、一八五九年から『ウゾーラ川の彼方の人々』と題する未完の作品を発表したことである。この作

品は後に、『森の中で』とその続編へと発展していくものであり、すでにこの頃から『森の中で』の基本的構想が形成されつつあったことを示すものとして注目すべきである。

文学活動以外にも、この時期の彼の活躍には目ざましいものがあつた。ダリーとの交際について述べた折にふれたが、一八五二年から五三年にかけて内務省の命令でニージニイ・ノーヴゴロド県内各地の統計調査の責任者として、メーリニコフは勤勉に、かつ精力的に働いた。その成果は一三巻の資料集ならびに彼自身の論文として発表された。<sup>(26)</sup>その他、例えばイヴァン雷帝の遠征行程の追跡をはじめとしてロシア各地を旅行して回り、ラスコールに関する研究論文や意見書を執筆するなどきわめて活発であつた。さらには、最近の研究によって、彼自身の手によるフォークロア作品のごく断片的な収集が、上でふれた任務による調査以外におこなわれていたことが明らかになっている。これについては、後に述べる。また、一八五三年にエレナ・アンドレーエヴナ・ルビンスカヤと「大変な物議」の後、再婚した。二人の間には三人の息子が生まれている。この中で長男のアンドレーイは考古学者、民族学者、郷土史家として父親の仕事を継ぐ形となつた。

##### 五、『森の中で』の執筆と晩年

二〇年間にわたる官吏としての仕事の後、一八六六年に彼は内務省付きの職を辞した。その後の晩年の生活は、雑誌編集に携わりながらの全体として落ち着いたものだった。

退職後の彼は長年のあこがれだったモスクワに家族とともに移り住み、モスクワ県知事の管轄下に置かれた。しばらくの間、チェルヌィシェーフスキイ横町に住んだ後、経済状態の悪化を理由にダリーの家（現在、モスクワの大グルジーンスカヤ通り）へ移り、そこで三年間暮らしている。その頃には暮らし向きもようやく良くなり、生活も安定

したためだろうが、彼の家には学者、文化人たちが出入りしたと言われている。

メーリニコフはこのモスクワの土地で、「モスクワ通報」「ロシア報知」などの雑誌の編集・発行に参加しながら、それらの誌上に自分の研究論文や小説を発表している。忘れてはならないのは、「ロシア報知」の誌上に一八七一年一月から一八七四年二月までの前後一七回にわたって『森の中で』が掲載されたことである。

ここで、作品『森の中で』が完成するまでの経緯をおおまかに見ておこう。ソコロヴァならびにM・II・エリョーミンによれば、この長編小説の構想がメーリニコフの中で芽生えたのは一八五〇年代の後半であるという。先に述べたが、その時期までの彼のラスコールにたいする見方は、教徒の弾圧を求めるといふきわめて否定的なものであった。したがって、彼が時代の中でも有数のラスコール通であったとしても、五〇年代半ばまでにラスコールの生活や習俗をテーマとする作品を書くなど思いつくはずはなかっただろう。

メーリニコフは一八五九年の「ロシア報知」で、『駆け落ち婚』というタイトルの小説を書く意図を明らかにしている。この小説の中心的モチーフは、タイトルに示されたとおり「駆け落ち」であるが、これは、ザヴォールジエの古儀式派の人々の間に実際に見られる「花嫁の略奪」похищать невест, саморытка, свадьба уходомと呼ばれる習慣のことであり、それはそのまま『森の中で』へと受け継がれたのである。小説の執筆意図は、ただちに実現された。それが、一八五九年に「ロシア日誌」に掲載された『ウゾーラ川の彼方の人々』である。ソコロヴァはこの作品と『森の中で』の両者に登場する主な人物を比較し、名前こそ違ってはいるものの、ほぼ同じイメージや性格をもって登場することに注目している。また、『森の中で』に数多く引用されたり、記されているフォークロアは、すでに前者でも、例えば民間の習俗、迷信、言い伝え、伝説、あるいは歌謡や諺として描かれている。したがって、一八五九年の段階にあって、『森の中で』の主要な登場人物をはじめとした基本的な構想と枠組みは出来つつあったの

であり、その意味で、作品『ウゾーラ川の彼方の人々』は「将来のエポペーヤ（叙事詩篇）『森の中で』の最初のスケッチである」と言つてよいだろう。このスケッチは、原因不明だが六章までで終わっているが、この作品の意義をソコローフは「メーリニコフの創作活動において、第一段階と第二段階をつなぐ連結部」であると結論する。すなわち、作品『ウゾーラ川の彼方の人々』は、中世ロシアの人々の生活を描いた五〇年代はじめの「風刺作家」としての彼と、七〇年代における「中世ロシア世界の歌い手」としての彼の両面に出会うというのである。<sup>(27)</sup> 第一段階を風刺作家とすることには問題が残るが、基本的にはこの捉え方は間違ひではない。そして、このことはとりもなおさず、五〇年代後半において、メーリニコフのラスコール観と、それを介して形作られていたロシア文化像が大きく変化していったことを意味している。それは、ラスコールニキという存在がたんなる一宗教異端であることを越えて、その中に中世以来の変わらぬ確固たる文化を体現する人々であると考えていくプロセスであつたと言える。

『ウゾーラ川の彼方の人々』の後、ほぼ一〇年の間、メーリニコフは将来の大作についてはっきりとした言及をしていない。<sup>(28)</sup> 一八六〇年代には彼によつてラスコールをテーマとする多くの論文が書かれているが、『森の中で』の準備段階を示すと思われるものはまったく表面化していない。ようやく一八六八年になつて「ロシア報知」の紙上に『ヴォールガ河の彼方で』と題する作品の最初の数章が発表された。そこには、すでに『ウゾーラ』で知られている人物たちが新しい名前で見せており、未来の大長編小説が形を見せはじめたと言える。そして、一八七一年からほぼ四年にわたり『ヴォールガ河の彼方で』の続編として『森の中で』が「ロシア報知」の紙上に連載されることになる。その後、この二つをまとめて多くの加筆訂正と六度にわたる校正がおこなわれた結果、一八七五年に『森の中で』。アンドレイ・ペチュールスキイによる『が単行本として出版された。

一八七四年に開かれたメーリニコフの文学活動を記念した集いで、彼は『森の中で』を書くにあたってはいかなる

プランも使用しなかったと語っている。むろん、これが事実でないことは、上で述べた一八五九年に始まる長い創作過程によって明らかだろう。題名の改変はそれがそのまま作者の考えの深化を示すこととして興味深い。

『森の中で』を書きおえた後、一八七五年のロシア文学愛好者協会の席で彼は、続編として『山の上で』を書くプランを明らかにする。『山の上で』は、その舞台をヴォールガ河中流地域の森の中から、ヴォールガ河下流右岸の丘地域へと移し、その土地のやはり旧教徒たちの生活と習俗を克明に描いたもので、一八八一年に完成している。

このように、最初の構想が浮かんできた時点から数えるとはば二〇年を経過して、メーリニコフの生涯の大作である『森の中で』とその続編が完成した。この長い時間は、題名の変更にも明らかなおりと、彼自身の視点や方法にも大きな影響をもたらし、多くの困難を強いた。しかしながら、この叙事詩は、断続的な休止があったとはいえ、彼の四〇年に及ぶ文学活動と研究から生み出されたものである。作品のスタイル、関心の方向性、題材の選び方など基本的な部分は、一八三九年に書かれた処女作「旅賞書」にもすでに現れているものだが、その後の長く複雑なプロセスの総決算こそがこの畢生の作品であった。そしてその背後には、同じ期間にわたる彼の民俗研究と、その同時代大きく展開しつあったロシア民俗学の成果が存在していたのである。

晩年の一〇一二年を彼はニージニイ・ノヴゴロド近郊のリャーホヴォ村、また、ニージニイ市内で過ごした。『山の上で』の最終部分を執筆する時期には、病気で身体が不自由であったため、再婚による妻に口述筆記をしてもらって完成した。『山の上で』の完成から二年後の一八八三年二月一日に彼は死去し、オカー川近くのクレストヴォズドヴィジェンスキイ修道院に埋葬された。六五歳であった。

## 第二章 作品『森の中で』の世界

### 一、作品の舞台ならびに登場人物

『森の中で』は全体の分量が千ページを越える一大長編小説である（一九〇九年に刊行されたマルクス版のメーリニコフ全集第二版では第二、第三巻が該当し、五五四ページ、五一九ページとなる）。全二巻、四部、さらに各部が一七、一三、一七、一八の合計六五章から成る。

作品の舞台となっているのは、ザヴォールジエと呼ばれる地域、すなわちモスクワから見てヴォールガ川の彼方の土地、ヴォールガ川中流の左岸地域である。そこは、ニジエゴロド、ケールジュニ、さらにはコストロマーに及ぶ深い森に包まれ、ピョートル近代化以前に生じたロシア正教の「分裂」により逃れた旧教徒を匿うには最適の場所であった。『森の中で』第一部、第一章の冒頭の数ページは、このザヴォールジエの地誌と習俗、ならびに簡単な歴史に関する描写にさかれているが、その叙述には、子供時代をそこで過ごし、知り尽くした作者メーリニコフの深い思いがこめられている。彼は作品の中で、この土地にたいするモスクワの人々の言葉として次のように記す。すなわち、ザヴォールジエの人々は「森の中に住み、木の株に向かって祈りを捧げ、樅の木のまわりで婚礼をおこなう。すると悪魔たちが彼らに歌いかける」。

こうした森の中に散在する村に住まう人々の生活がこの作品の中心的題材となるが、彼らは、作品中の出来事が展開される一九世紀の半ば過ぎ（六〇年代後半）にあっても、祖父の代から続く儀礼や習俗を守り、古くからの言い伝えを語り継ぐ人々である。もっとも、「古くからの」とは言っても一七世紀半ばのニーコン改革、異端派の形成と教

会分裂より以前の、という意味である。

森の中でひっそりと生活を送り、自らの信仰に忠実に生きる者の中でも、作品の主要な登場人物となっているのは、地方の名士であるチャプリーンとその一家、彼の姉のマネーフアと彼女の僧院に住む尼僧たち、それに、彼らのもとを訪問する人々である。この人物群像は生活空間から見れば、次のように分かれる。

一、オシポフカ村——チャプリーン、彼の妻アクシーニヤ、二人の娘ナースチャとパラシヤ、アクシーニヤの兄ニキーフォルその他。

二、コマロヴォ村の僧院——マネーフアと彼女の娘フリョーヌシカ、その他の尼僧たち、マリーア・ガヴリーロヴナ、モスクワからの使者ヴァシーリイ

三、ポロモヴォ村——「髭の」トリーフォンと妻フォークラ、息子のアレクセイ

四、ニージニイ・ノーヴゴロドの町

チャプリーンについては実在のモデルとなった人物がいたとされているが、彼はザヴォールジエのこの土地の手工業者・商人として、「千万長者」と呼ばれる実力者である。彼のためには周辺の二〇もの村から働きにやって来る者がいる、と書かれ、彼の名士ぶりは娘のナースチャの葬式に参列したのが二千人にも及ぶとされていることからもうかがえるだろう。また、メリーニコフはこの千万長者について、「ポタープ・マクシームイチにたいする人々の敬意は絶大であった。ザヴォールジエでは会釈なしに彼のそばを通り過ぎる者は一人もいなかった。……まわりの人々は彼のことを、その面前でも、いない所でも「われらのご主人」と呼んでいた」と記している。彼の意志は「掟であり、その愛情は思いやりを、怒りは大きな災いを」意味するのであり、文字通りヒーローとしてチャプリーンは描かれている。

彼が商売のこととなると熱中する実業家タイプの人間であることは、男性たちの間で盛り上がる会話や砂金探索の旅によって知ることができる。その一方で、信仰に関しては主導権を女性たちに完全に譲っている。家に戻れば「しきたりに従って」女性に着替えを手伝わせるチャプーリンも、ラスコールの問題になると、妻や娘たち、姉のマネーファにたいしてほとんど発言権を持たず、家長として、閑白亭主として、土地の名士としての権限や面目はまるで見られないのである。「ラスコールは女たちのこと」であり、「信仰のことは昔から女性たちによって遵守されてきた」からであり、このため、チャプーリンが妻の言葉に従順に従う光景がたびたび描かれている。「ポタープ・マクシームイチは反駁しなかったし、してはならないのだ」といった具合である。

しかしながら、神現祭（旧暦一月六日のキリストのヨルダン川での洗礼を祝う祭）には聖水を持ちかえったり、礼拝には必ず参加すること、マネーファには寄進を怠らないことなどから見ると、旧教徒としての信仰には忠実で敬虔な信者であることに変わりはない。そして、アレクセイをはじめとした多くの登場人物にたいする態度から窺えるように、他人にたいしては素直に心を開く善良な男であり、誠実さ、率直さなどの点で、作者がこのチャプーリンをロシア人の善良なる人物の典型と理想として作品の中心に置いたことは疑いようもない。

こうしたチャプーリンに代表される世俗的生活（それは、そのままアレクセイへと延長される）とはまったく対照的な位置にいるのが、彼の姉のマネーファであり、彼女の僧院と草庵に住む人々である。指摘するまでもなく、マネーファは信仰にたいしては忠実な僧院の長であり、特に自分の僧院をはじめラスコールの僧院に切迫する存亡の危機にたいして深く心を砕いている。信仰と使命にたいする姿勢には並々ならぬものがあり、周囲の人々の敬愛を集めずにはおかないのである。彼女のこうした情熱は、一方では、彼女の過去とつながるものである。すなわち、娘時代に彼女はある男性と愛し合い、その男性との間に生まれたのがほかならぬ、自分の手元において見習いの尼僧として

ともに信仰の道を歩むフリオヌシカなのである。その男性とは、数十年を過ぎて再び人々の前に姿を現した「巡礼者」ヤークムである。マネーフアが、この昔の恋人の出現に驚き、動揺する場面、衝撃のあまり床に倒れ伏す場面、また、この男が詐欺師であることが判明し、さらに驚愕する箇所などは、彼女の内奥の微妙な動きとともにきわめて巧みに描かれている。

心の内に情熱を秘めた女性としてマネーフアが描かれているのと同じことは、物語に登場する他の女性についても言える。例えばそれは、チャプリーンの娘のナースチャに典型的な形で見られるものである。一目惚れのアレクセイとの美しく、若者らしい恋愛、その恋も、金銭や砂金のことに熱中してしまうアレクセイの心変わりによって悲恋へと展開し、さらには、彼女を待つ運命はより過酷な結末を準備している。すなわち、ナースチャの自殺であり、その事件は作品全体を通じての最大のクライマックスとなっている。

マネーフアの娘のフリオヌシカにも同じことが言える。彼女は、自分の母親とは知らないマネーフアには従順だが、その一方で、若い男女のカップルをそそのかして駆け落ちを勧めたり、尼僧たちの前で世俗歌謡を歌ったりする。彼女の快活さや陽気さは歓迎されるとはいえ、時には、同僚の尼僧たちの矚躑を買うのである。こうした表面的には明るく、時に羽目を外す彼女も、自分の慕う男性への思いを深く心の奥底に秘める女性であり、人一倍敬虔な尼僧である。彼女は、『森の中で』の続編の『山の上で』において剃髪を選択することになる。さらに、同じくマネーフアの草庵に住む未亡人のマリーヤ・ガヴリーロヴナは、一度は信仰の道に生きようとするが、アレクセイとともにニージニイの町に出ていく女性として描かれる。この他、チャプリーンの妻のアグラフェーナ、アレクセイの母フォークラなども、作品の中心人物ではないが、それぞれ母親として、妻としての悲哀をそなえて物語に加わっている。

以上のような登場人物の性格による物語の世界は、全体として見ると、チャプリーン、アレクセイに代表される

男性の世俗的世界と、マナーファをはじめとした尼僧たち、チャプリーンの妻と娘の女性の世界、あるいは非世俗的部分とに分かれる。さらには、チャプリーン、マナーファの世代と、ナースチャ、アレクセイ、フリョヌシカなどの若者の世代の対置、オシポフカ村と修道院を包み込む森の世界とニージニイの世界の対比なども『森の中で』の物語を構成している基本軸として考えられる。

## 二、物語の展開

物語全体の展開のあらまはは次のとおりである。まず、チャプリーンの一家が一月五日の晩の神現祭を祝う平和な日常生活の場面から始まる。それに続いて、森の奥から出てきた若者のアレクセイがチャプリーンに雇われ、ナースチャと恋に落ちることから物語は大きく展開する。この二人の恋が美しく、ロマンチックに描かれていく中で、今は詐欺師となったヤーキムが登場し、森の中に砂金があると吹聴することで、アレクセイの心はそちらに向いてしまう。チャプリーンもまた、この山師の巧みな言葉に熱中する一人であり、彼が砂金を求めて森に入っていくことで第一部は終わる。一方、チャプリーンの留守中に、アレクセイとナースチャの恋は破局を迎え、彼は新たな恋人マリーヤへ気を移す。捨てられたナースチャは、母親に妊娠の事実を打ち明けて、両親にたいし何度も許しを乞いながら死んでいく。第二部の後半は、おもに彼女の死をめぐる物語は展開されている。

第三部にはいるとアレクセイは、ナースチャに死をもたらした張本人としてチャプリーンのもとを解雇されるが、その後、マリーヤとともにニージニイの町に出る。田舎から都会へ出た彼はそこで富を築き、しまいには、チャプリーンから借金を取り立てるまでに成り上がっていくのである。ここには、森の中で純朴に住まう善良な若者が都会の拝金主義によって翻弄されていく様子が描かれている。一方、ナースチャの妹のパラーシャは、尼僧たちとともに聖

者の墓参りに旅立つが、その間にモスクワからの使者のヴァシーリイと愛し合うことになる。この二人は、周囲の若者たちの手助けもあって駆け落ちをし、最後には、チャプリーンの祝福を受けてハッピーエンドとなるのである。

以上がこの物語の粗筋だが、全体として見れば、事件の基本軸となっているのはナースチャとパラシヤという姉妹の恋愛の顛末である。それはいかにも単純で、古典的な筋の構造である。しかし、その背景としてチャプリーン一家ならびに僧院の人々の生活が連綿と描写されるのを合わせて読む時、ここにひとつの壮大な作品世界がザヴォールジェの森の中を舞台とする、あたかも一大絵巻として呈示されるのである。

物語全体の時間的な幅は、年の初めからほぼ半年余りである。この短期間に上で述べたすべての事件が起こることになる。再度、筋を振り返って、物語のカレンダーを作ってみると次のとおりである。

第一部——神現祭を迎えるチャプリーン一家・チャプリーンがアレクセイを雇う（一月一三日）・妻アクシ

ニヤの名の日の祝い（一月一三日）・ストコロフの巡礼話が披露される・チャプリーン一行が砂金  
捜しで森へ・チャプリーンがニージニイの町へ（三月九日）

第二部——チャプリーンのもとから帰ったマネーファが病床に就く（一月二七日）・アレクセイとナースチャ  
の不和・チャプリーンの帰宅（大斎後）・アレクセイとマリーヤの出会い・ナースチャの死・彼女  
の葬式

第三部——アレクセイが解雇され、家に戻る（六月初め）・ナースチャの四〇日供養（六月半ば）・アレクセイ  
いとマリーヤがニージニイの町へ・フリョーヌシカ、パラシヤたちの巡礼団が墓参へ出発・パラ  
シヤとヴァシーリイの恋・聖ペテロ祭を迎えるチャプリーン一家と僧院（六月下旬）・町で成り上が

っていくアレクセイ・森の火事

第四部——パラシヤとヴァシーリーの駆け落ち・チャプーリンによる祝福（七月初め）

ここにも一部が示されているが、神現祭から聖ペテロ祭までという年間の生活サイクルを形作る重要な祭が物語の外枠を成している。それに加えて、例えば、チャプーリンが森から帰宅した大斎後の時期に合わせて、復活祭、ラードニツア（招魂祭）、さらには春夏の神ヤリーロについて詳しい記述が見られるし、第四部でも、聖ペテロ祭と期を同じくしてイヴァンの夜の習俗や、キーテジの町やスヴェトロヤールの湖の言い伝えとともにその時期の集いが描写されている。これらは年間の歳時的な祭と習俗だが、それとならんで、チャプーリンの娘たちをめぐっての葬式、法要、結婚式など人生の通過儀礼も多くが記されている。しかも、この各種の儀礼と習俗は、物語そのものの筋とも密接に関わる形で巧みに配置されていることも注目すべきである。

このように見てくるとメーリニコフは、わずか半年の物語の展開であるが、その時間の中にできる限り数多くの祭と習俗を押し込めたといえる。そこには、作者のインテンションが物語それ自体の必要によるものとはいささか別の形で表現されていると考えてみるのは間違いだらうか。

## 第三章 民俗学の中のメーリニコフ

## 一、叙述の方法

前章では『森の中で』の作品世界を概観したが、次に、この作品にたいする批評について見る。

革命前のすぐれた文学史家であるヴェンゲーロフは、作品『森の中で』について最初の二部（第一巻）のみが価値を持ち、残りの第三、第四部はそれ以前の繰り返しであり、何一つ付け加えるものがなく、退屈だと酷評している。本論文の以下で述べることからすれば、後半の二部も前半を凌ぐほどの豊富な資料が見出されるばかりか、物語の筋展開そのものからしても興味ある部分が多い。したがって、ヴェンゲーロフの見解には疑問が生ずるのは当然である。しかしながら、『森の中で』をあくまでも文学作品としてとらえようとすると彼の視点にもう少し関わってみたい。ヴェンゲーロフの指摘をその個別箇所において批判すること、ないしは最初から問題の枠外に置くことは簡単で、何時でも可能であるからであり、むしろ、彼の指摘の根幹に存在する部分（そして、それは彼のみならず、『森の中で』にたいする現在までの文学作品研究に共通するものである）にこだわること、一つの別の視点がほの見えてくるかも知れないと思えるためである。

まず、個々の人物の形象化という点からすれば、事実、ヴェンゲーロフの指摘するように、ほぼ前半の第一、第二部で終わっていると言える。主要な人物については当然だとしても、その他の多くの登場人物で第三部以降で初めて姿を見せる物はまったくくない。そして、すでに述べたように、物語全体の筋がきわめて単純であることと考え合わせれば、ヴェンゲーロフの見解は間違いいではない。そして、この問題は、作品『森の中で』にたいして必ずと言って

よいほど語られる、叙述の長ったらしき、冗長さという素朴な印象と、それにもとづく論評とはっきりと結びつくのである。

これは、作者の叙述手法の問題であらう。メーリニコフは、例えば、作品にはじめて登場する人物にたいして、その人物の経歴を詳細に述べることを忘れない。その紹介は、時として何十年もさかのぼるほどの実に子細なものであり、略歴紹介のために、一章全体をさくこともあるほどである。第一部第三章のロフマートイ、第八章のダリーヤ、第九章のニキーフォル、第十章のグルーニヤとその夫、第十七章のコルイシキンなどがその例である。これ以外にも、新しい人物が話題にのぼると、必ずと言ってよいほどつぶさに紹介がおこなわれるのである。そしてこれは、作品全体の叙述にまで及んでいる。物語の基本的な筋展開にたいして、エピソードを付け加え、さらにそのエピソード自体を大きく膨らませているのである。それは、「特別な方法による引き延ばし」として話の展開を遅らせる手法 *peripetia* として理解されるだろう。このために、例えば第一部第一章から二章にかけて、アクシーニヤの名の日の祝いの席で、男たちは不意に出現した山師による砂金の話で持ちきりとなり、砂金捜しの旅へと全員の気持ちが動く。読者の関心もその方向へ向かっていくのがさけられないにもかかわらず、続く第一章では一転してマネーファの過去が回想される。そして、ようやく第四章でチャプリーン一行の立出が述べられるのである。

以上のことから明らかなおと、作品全体の叙述は筋を構成する基本的な流れと、それを補い、時に遅らせたり、逸脱する形で流れる二次的エピソードの二つから成り立っていると見える。特に、後者のエピソードや詳細な民俗記述と、それに加えて、ラスコールという題材、舞台がザヴォールジエという「辺境」、千ページを越える分量——こうした条件が重なり合って、叙述が冗長であるとか時代遅れであるといった論評が生まれたと考えるとよい。そして、さらには『森の中で』が文学作品としては注目に値しないといった消極的評価が大勢であったのである。

ここでこうした大勢に反論すべく、文学作品としての『森の中で』の再評価の論点を提起することはしない(ただし、これまでのメーリニコフ研究史を簡単にふりかえった「問題の所在」の箇所でもふれたように、ダーリをはじめとした同時代ならびに後世の文体論・語彙論の観点から作品を点検すれば、『森の中で』を一九世紀のみならず二〇世紀にまで至る文学史の中で正当に位置づけ直すことは十分に可能であると思われる)。むしろ、ヴェンゲーロフを筆頭として、狭義の文学史的枠の中では『森の中で』が魅力ある作品として見えてこず、むしろ、切り捨てられた部分に注目してみたい。「冗長」と言う時、何がそう言わせるのだろうか。

ヴェンゲーロフは言う、『森の中で』の「大きな欠点はメーリニコフが描写にとつて有利な生活の側面のみを取り上げたことにある」と。そして、メーリニコフが「労働の生活には、ほとんどまったくと言ってよいほどふれていない」と批判する。しかし、むしろ注目したいのは、ヴェンゲーロフの言う「描写にとつて有利な生活の側面のみを取り上げたこと」である。そこにこそ、メーリニコフの「方法」がはっきりと浮き彫りにされていると言ってよい。ここではヴェンゲーロフの素朴な「労働至上主義的な民衆観」は意味を持たない。たしかにチャプーリンは千万長者であり、地方の名士として君臨する金持ちであり、農民ではないし、ここで描かれる生活もいわゆる民衆の労働の日々とは異なるものであろう。しかしながら、登場人物の生活の描写と、一見それとは異質に見える民俗的習俗・儀礼の記述とは、巧みに結合して一つの綾を織りなしている。作品全体を通じて、そこには儀礼や歌謡、言い伝え、伝説、また食事、服装、部屋の調度にまで及ぶ記述が延々と続くのであり、作者は「それらの詳細な描写にページを惜しむことがない」のである。

作者のメーリニコフが民俗記述にたいして異様なまでの熱意をいだいていたことは、各章の書き出しの部分をつくつて点検することで明らかとなる。第一部の第一、五、七、一五章、第二部の第一、七、八章、また、第三部の第一

章、第四部の第一、七章などがその例であり、そこではいずれも、地誌、習俗、儀礼、民間信仰についての綿密な記述がなされている。章全体がそうした記述にあてられている場合(第四部第一章)、また、物語の筋進行を一時的に中断する形で記述を折り込む場合もある。その記述が多面的、客観的で精緻であるという点で、研究論文を思わせるのであり、作者の意図が筋を展開するよりも民俗を記述することにあった、という印象を与えるほどである。事実、スカビチェーフスキイはこの作品には芸術的にすぐれた部分は見出せないとしながら、メーリニコフにとっては民族誌を書くことが目的だったとまで評するのである。

## 二、メーリニコフのフォークロリズム

このように考えてみると、文学批評・研究の面からはみ出したところで我々が出会うメーリニコフの広義の文体とイデーが、その輪郭を見せてくれることになる。その意味で我々の議論に多くの示唆を与えられるのは、II・C・エジョーフが『森の中で』のナロードノスチを支えるものとして、次の二つをあげていることである。それは、フォークロア・民族誌・地理学をめぐる莫大な資料の利用、ならびに叙述のフォークロアの文体化という二点である。<sup>(30)</sup>この指摘はきわめて適切である。そして、便宜的にはこの二つに分かれるとしても、この論点はロシア民俗学でフォークロリズムというチームによって問題化されてきたものである。

この点に関してはこれまで、ごくわずかだが研究があるので、この問題をめぐる研究史についてふれておく。まず、この問題にたいして最初に問題提起をおこない、本格的に取り組んだのは、先にあげた一九三〇年代に発表されたヴィノグラードフのモノグラフである。この仕事は、その論文タイトルから明らかとなり、作品中に引かれた、ないしは文体として一体化したフォークロア叙述の「出典説明」をテーマとしている。ヴィノグラードフは、作品『森の

中で』に現れるフォークロアの全体を考察対象として、きわめて多岐にわたる綿密な分析をおこなっており、その事実調査は実証レベルでは、現在にあっても意義を失ってはいない。特に、『森の中で』の成立にとって不可欠とも言えるアフナーシェフの『スラヴ人の詩的自然観』に実現された神話的世界観との比較・対照は大きな意味を持っている。ただし、アフナーシェフのみならず同時代の文献のみに作品内の叙述の出典を求めるあまり、ひとつの問題をもはらんでいる点は注意しなければならない。

すでに述べたように、メーリニコフは一八四〇年代に民俗研究を開始し、ロシア各地を旅して回っている。さらには、任務として各地の調査に参加しており、このことから、メーリニコフ自身が調査によって得た資料を持っていたと考えるのは、ある意味で自然である。しかしながら、彼の採集資料についてはこれまでまったく見出すことができず、それ故にヴィノグラードフの見解もやむをえないものであった。

しかしながら、こうした状況はヴィノグラードフの問題提起から半世紀以上も経過した現在、徐々に変化しつつある。というのも、メーリニコフ自身の収集によるメモがピョートル・キレーエフスキイの手元に残っていた文書（ペテルブルグのロシア科学アカデミーロシア文学研究所に保存）の中から発見され、それが公表されたからである。周知のごとく、キレーエフスキイは一九世紀前半から半ばにかけて、同時代のほとんどすべての文学者、思想家などのインテリゲンツィヤのフォークロア資料の収集ネットワークの中心にいた人物である。このキレーエフスキイへ送られた資料とは、メーリニコフ自身がニージニ・ノヴゴロド周辺で採録した歌謡一つ、コリヤダーと呼ばれるクリスマスから新年の儀礼歌五つ、それに諺である<sup>31)</sup>。分量はわずかであるとはいえ、メーリニコフが自ら採集活動をおこなっていたことを確認するものとして興味深い。

こうした最近の成果を踏まえながら、先のヴィノグラードフの問題提起と労作を引き継ぐ形の研究が一九七〇年代

になっておこなわれた。それは、題名が明らかにヴィノグラードフ論文の延長であることを物語っているソコロウヴァ「再び、メーリニコフ＝ベチュールスキイの長編小説『森の中で』のフォークロアの出典について」（一九七一年）、そして、作品の中から泣き歌のみを取り出してその出典との比較をおこなったK・B・チストーフ「П・И・メーリニコフとИ・А・フェドソヴァ」（一九七二年）の二つの仕事である。これらは、『森の中で』の民俗記述の典拠を書物のみに求めたヴィノグラードフを越えるものとして構想されている。例えばチストーフは、「歴史家で考古学者であるメーリニコフは、彼自身がフォークロア収集家ではなかった」と結論づけたヴィノグラードフの基本的認識が、ロシア文学研究所の草稿部門にある原稿ならびに公表された作家のメモと書簡によって反駁されるとした後、さらに次のように述べる。

ひとつのテキストから他のテキストへの借用を示すために必要なことは、ある一つの例の対照ではなく、細部に至るまで及ぶ正確な符合を示すことであり、あるいは、もしも「書物の上での」借用が問題となっているならば、ある地方の伝統の中でそのモチーフが存在しないことを明らかにすることである。<sup>(32)</sup>

ここには、ヴィノグラードフの照合における方法のレベルにまで及ぶ批判がある。ここからチストーフは、メーリニコフの作品における民俗的要素（フォークロリズム）の問題を「書物か、口承かといった二者択一としては立てられない」として、たんなる出典明示から脱却する方向を提起しようとするのである。

## 三、ロシア民俗学の時代

彼が生まれ、活躍した時代は、結論的に述べるならば、ナロードの文化の「発見」の時代であった。この場合のナロードとは「民族」であり、同時に「民衆」でもある。そしてナロードの文化にたいする関心をもっとも象徴的に集約させたのが、一八四五年の帝室ロシア地理学協会の設立であった。メーリニコフが設立早々、この協会の会員となっていたことはすでに述べた。

むろんそれ以前にも、ナロードの文化にたいするロシア・インテリゲンツィヤの強い関心は、彼らのアイデンティを成立させるべく、顕在化していた。一七七六―八〇年にドイツ語で刊行され、ただちにロシア語、フランス語の訳本も出版されたИ・Г・ゲオルギの『ロシア帝国内に住む諸民族の記述』は、文字通り民族誌の時代を切り開く作品となり、おそらくは、このゲオルギの著作からИ・И・ケッペン『ヨーロッパ・ロシア民族学地図』（一八五一年）までが民族学「前史」の段階と考えられる。

口承文学としての民俗学について見よう。例えば諺のテクスト集については、А・А・バルソフ『四二九一の古いロシアの諺集』（一七七〇、七八、八七年）をはじめとして、И・М・スネギリョフによる『諺の中のロシア人』（一八三一年）、Ф・И・ブスラーエフ『ロシアの諺・慣用語』（一八五四年）、そしてダーリの『ロシア人の諺』（一八六二年）によって一つの典型が生まれたと言える。文章構造の単純さで諺と同列に置くことのできる謎々や呪文については、И・А・フジャコフ『大ロシア謎々集』（一八六一年）、Л・Н・マイコフ『大ロシアの呪文』（一八六八年）をあげることができる。

次に、昔話については、一八世紀後半から末にかけての作家たちによる「昔話模倣」（例えば、М・Д・チュルコ

ーフ『愉快な人物、あるいはスラヴの話』一七六六年、B・A・リョーフシン(チュルコフ?)『ロシア昔話』一七八〇—一八三年、など)、あるいは一部の昔話採録(チモフェーエフ『ロシア昔話』一七八七年、ベレザイスキ『田舎の昔の小話』一七九八年、など)を契機として昔話にたいする興味が生まれ、一八三〇年代前半におけるプーシキン、II・II・エルショーフなど多くの作家たちによる「昔話創作ブーム」へと展開されていった。この時期に、言語文化としての昔話の意味がロシア社会の基本的認識コードの一つとなったと言ってよい。そして、B・ブローニツィン『ロシア昔話集』(一八三八年)、サーハロフ『ロシア昔話集』(一八四一年)などを経て、アフナーシエフ『ロシア昔話集』(一八五五—一六三年)、同『ロシア伝説集』(一八五九年)、さらに、フジャコフ『大ロシア昔話集』(一八六〇—一六三年)、A・A・エルレンヴェイン『村の教師が集めたロシア昔話』(一八六三年)、E・A・チュジーンスキイ『ロシア昔話、地口と小話』(一八六四年)、II・H・サドーヴニコフ『サマラ地方の昔話と伝説』(一八八四年)と相次いでいる。

民謡、歌謡についてはどうか。B・テプローフ『仕事の合間の暇つぶし、あるいは歌謡集』(一七五七年)、チュルコフ『歌謡集』(一七七〇—一七四、一七七六年)、楽譜付きの最初としてB・トゥルトーフスキイ『ロシアの素朴な歌謡集』(一七七六—一七九五年)、E・H・ノヴィコフ『新しい完全ロシア歌謡集』(一七八〇—一八一年)、E・メイエル『最良ロシア歌謡集』(一七八一年)、民謡というテーマがはじめて登場したH・A・リヴォフとII・プラーチによる『ロシア民謡集』(一七九〇、九六、一八〇六、一五、九六年)、II・II・ドミートリエフ『ボケット歌謡集、あるいは最良の俗謡・庶民歌謡集』(一七九六年)、プイリーナを収録したことで知られるキルシヤ・ダニーロフ『ロシア古詩集』(一八〇四、一八、七八、九三年)、H・II・カーシン『ロシア民謡集』(一八三三年)、ツイガーノフ『ロシア民謡集』(一八三四年)、Φ・ストウジーツキイ『ヴォログダ、オロネツ県民謡集』(一八四一年)、さらに、一九世

紀後半にはいると、M・A・スタホーヴィチ『ロシア民謡集』（一八五二年）、A・П・メトリーンスキイ「南ロシア民謡集」（一八五四年）、民謡でもさらにジャンル下位区分されて、B・И・ヴァレンツォーフ『聖歌集』（一八六〇年）、フジャコーフ『大ロシア歴史歌謡集』（一八六〇年）、ベツソノフ『巡礼歌謡集』（一八六一年）、同『わらべ歌集』（一八六八年）のようなテキスト集も編まれた。だが何といっても時代を画すものとして、ヤクーシキン『ロシア民謡集』（一八六〇年）、ピョートル・キレーエフスキイ『歌謡集』（一八六一―七四年）、П・H・ルイーヴニコフ『歌謡集』（一八六一―六七七年）、П・B・シェイン『ロシア民謡集』（一八六八―七七七年）、A・Φ・ギリフェルジーン『オネガ・ブイリーナ集』（一八七一年）、E・A・バールソフ『北部泣き歌集』（一八七二年）などの基本的テキストの刊行があり、この時代のフォークカルチャーへの熱狂ぶりを物語っている。

この中で、特にメーリニコフとの関連でコメントが必要なのは、まずバールソフ『北部泣き歌集』である。このテキストが『森の中で』の創作の上で利用されたことは、先にあげたチストーフによって論証された。バールソフのテキストの刊行年そのものが『森の中で』と微妙に重なることから、前者テキストの原稿段階で、ないしは初出時点において、メーリニコフが参照したというチストーフの議論にはわずかの疑点が残るとはいえ、両テキストのあまりの符合はそれによってしか説明されないだろう。

メーリニコフとの関連でもうひとつ注目すべきなのは、ピョートル・キレーエフスキイ『歌謡集』である。一八二〇年代にプーシキンとA・И・ソボレーフスキイによって『民謡集』出版の計画が生まれ、それ自体は挫折したものの、当時のインテリゲンツィヤたちが共同で歌謡を収集し、テキスト化していこうという試みはキレーエフスキイに受け継がれた。彼は一八三三年に、計画のみに終わった未刊テキストをプーシキン、ソボレーフスキイから受け取り、さらに同時代の多くの作家をはじめとしたインテリゲンツィヤが採集した膨大なテキストを編纂、出版する仕事に従

事した。資料を送った作家としては、プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、A・B・コリツォーフ、A・X・ヴォストロコフ、ピーセムスキイ、A・M・ヤズィニコフ、歴史家のK・M・カヴェーリン、ポゴージン、民俗学者のスネギリョーフ、ヤクーシキン、Φ・C・クズミシチェフなどの名前をあげることができる。そして、こうした人々の中にメーリニコフとダリーもいた。キレーエフスキイのコレクションは一八四八年に一部が発表されたが、その後は検閲によって思うように進まず、一八六〇年代になって上記のテクスト集が公刊されたのである。もっともこれらも一部であり、現代においても、未刊のコレクションを整理し、刊行する作業が継続している。規模の点だけからしても、当時の西欧でも例を見ない大事業であった。

神話と祭、習俗の分野では、一八世紀後半から一九世紀初頭までが、西欧の古典古代の単純なアナロジーでまわっていた段階(チュルコーフ『神話小レクシコン』一七六七年、同『ロシア迷信事典』一七八〇年、同『ロシア迷信いろは』一七八六年、M・II・ポポーフ『スラヴ神話・伝説簡略記述』一七六八、七二年、A・C・カイサーロフ『ロシア・スラヴ神話』一八〇四、一〇年、など)から、スネギリョーフ『ロシア庶民の祭と迷信的儀礼』(一八三七—三九年)、サーハロフ『ロシア民衆の伝承』(一八三八—四九年)、A・B・テレーシチェンコ『ロシア民衆の習俗』(一八四八年)といったモノグラフの出現へと展開していった。後者の三点は、部分的には信憑性を欠くが、それでも年間の祭や歳時儀礼と民間信仰といった問題領域の全体を提示したことで大きな意味を持った。そして、こうした一九世紀半ばまでの問題関心を引き継ぎながらも、同時代の西欧における同種の研究に大きな影響を受けながらロシアでそれを発展させたのが「ロシア神話学派」と呼ばれる人々の仕事である。このグループの代表者たるアフナーシエフの理論的モノグラフである『スラヴ人の詩的自然観』(一八六五—六九年)は二千ページを越える大著であるだけでなく、ギリシャ・ローマの古典古代とは違ってパンテオンとしての体系を持たぬロシア・スラヴの神話世界を

一九世紀後半の時点で再構成しようとしたテーマ性の点で注目すべき著作である。ヴィノグラードフが『森の中で』の全体について実に精緻に比較対照し、確認したように、メーリニコフがヤリーロ神をめぐる信仰をはじめとして作品の多くの箇所を記述する上で全面的に依拠したのが、他ならぬこの『スラヴ人の詩的自然観』であった。

#### 四、メーリニコフの「民俗学」

『森の中で』におけるメーリニコフの「民俗学」とは何か。そのことを考える手がかりとして、メーリニコフの晩年に書かれた一通の書簡をあげる。一八七五年、民俗学者のパーヴェル・シェイン宛てに彼の『ロシア民謡集』（一八六八―七七年）にたいする批評として送られたものである。

四半世紀の間、私はロシアの隅々を歩き回って、数多くの民謡、言い伝え、民間信仰、その他多くのものを書きとめてきました。しかし、今は亡きダーリ、キレーエフスキイ、そしてボジャーンスキイのもとで出版された貴兄の仕事がもしもなかったならば、また、レオニード・マイコフ、そしてヤクーシキンの仕事があったとすれば、私は一步も前進できなかったでしょう。<sup>(33)</sup>

ここには、メーリニコフ自身の調査・資料収集と、親友としてのダーリ、また、同時代の民俗学的文献（わずか一部ではあるが）がメーリニコフの民俗学を形作っていったことが語られている。もっとも、作品『森の中で』により多くの焦点を当てるならば、アフナーシェフの神話再構築の仕事、ならびに、バールソフによって編纂された泣き歌のテクストをここに加えるべきだろう。そしてさらに、より多くが潜在するはずの、いまだ対応関係が十分解明され

ていないフォークロア・テクスト(ここで、フォークロア、テクストという言葉とも広義で使用されている)もここに加えられるべきかもしれない。そうした「出典」を明らかにするという実証的作業が(もちろん、ここではすでに上記の研究史をふりかえるならばチストーフの論点を前提としている)今後とも絶対不可欠であるのは言うまでもない。しかし、ここで指摘したいのはむしろその先の問題であり、メーリニコフにとっての民俗学を成立させていた問題関心が何かという点である。

冒頭で紹介した、メーリニコフの文学を核心部分でとらえたと思われる文学史家のM・スローニムは、メーリニコフをヤクーシキン、ダニレーフスキイとならぶ「地方主義」の作家とする。しかも、その代表者であるという。この指摘は、たんにそれまでのペテルブルグ、モスクワを舞台や題材とした作品ならびに文学活動から地方のそれらへ、という重点の移動と拡散のみでは理解されない。それは、おそらくスローニム自身の意図を越えてより広い文化史的コンテクストの存在を示唆するものであろう。

地方とは何かとは、ロシアにあっては一八世紀後半から問題化された文化的テーマである。その時期以降、ローカルな文化への関心は、例えば「地方語」にたいする注目や一種の「方言辞典」の出版として、また、農村生活・田園への憧れとして現れていった。後者は、言うまでもなく、都会の貴族生活の腐敗と汚れに対立するものとしての田舎の農民生活の健康さを歌い上げた田園讃歌としてである。その例は、B・K・トレヂアコーフスキイの「自然の美にたいする手紙」の中にある「田園生活の讃歌」をはじめとして、Г・P・デルジャールヴィンの「ロシアの娘たち」(『アナクレオン風詩集』一八〇四年)、そしてノヴィコフの「農村生活の楽しみにまさるものはない」(雑誌『蜜蜂』一七六九年六月)という言葉に見ることができる。この農村賛美は、他方で、西欧からの影響とロシア内での発達によるセンチメンタリズムからロマンチズムへという潮流の中でさらに展開していくこととなる。その意味で、

こうした文学潮流の直中にあったH・M・カラムジーンの散文小説の代表作『あわれなリーザ』（一七九二年）について記された次の言葉は、きわめて多くのことを語っているのである。

『あわれなリーザ』は多くの点で興味深い作品である。カラムジーン以前の作家でこれほど少ない言葉で、これほど多くのことを語ることでできる者はいなかった。例えば、気分をこめて、しかもまぎれもなくクリール・ロカールとともに風景を描くことができたのは彼が最初であった。<sup>(34)</sup>

ここには、カラムジーンの時代になってはじめてローカリズムがはっきりとした輪郭を与えられるにいたったことが読み取れるのである。

この時代に続いてデカブリスト期には、ロシア・ロマン主義の影響もあって、民族・民衆であること、あるべきことを意味するナロードノスチという言葉とともに、「地方性・地方色」を意味するメースノスチ *мещинство* という語が作られ、さかんに使われていった。雑誌「モスクワ通信」（一八三〇年三号）は次のような宣言をした、「ナロードノスチとメースノスチ、これこそが現代の我々の要求である」。

したがって、一九世紀前半には「地方」の文化史的意義がロシア社会の中で確認されていたのであり、H・K・ピクサーノフが言うところの「地方文化の巢」が形成されていったのである。このように、メーリニコフもその一翼を担っていた「地方学」「郷土研究」が一九世紀半ばを画期として大きく展開していくこととなった。その具体的実例のひとつは、当時、各県で上からのヘゲモニーによって刊行されていた「県報」であり、そこには、多数の古文書やローカルな習俗誌など貴重な民俗資料が公式文書とともに掲載された。メーリニコフが自身の研究成果で「県報」

の紙面を飾ったことはすでに述べた。

Д・К・ラヴロフとФ・А・ペシキンはメーリニコフの郷土史研究を考察して、そのテーマには次の五つが認められるという。一、ニージニイ・ノヴゴロドならびにその大公国の歴史、二、一七世紀初頭のニージニイ・ノヴゴロドとニージニイ・ノヴゴロド人と、ポーランド貴族の侵入からのロシアの解放における彼らの役割、三、ニージニイ・ノヴゴロド定期市の歴史と、一九世紀におけるその状況の分析と展望、四、都市、集落、住民グループ、修道院と教会の歴史、地方生活のさまざまな事実、人々の特徴づけ、五、ロシアにおける教会分裂の研究<sup>35)</sup>。

こうした地方研究の大きな振幅の中で、メーリニコフの民俗研究は展開されていた。同時期のロシア民俗学は、いまだ理論的には十分な成果を生み出しえず、制度としてのアカデミズムも形成しえない段階でありながら、他方では「アマチュア」のインテリゲンツィヤが各地を徘徊して得た膨大なフォークカルチュアのテクストを全身で抱えていた。そうした生成期の民俗文化研究の中で、メーリニコフの民俗学が構想されていたのである。

- (1) トーカレフ『ロシア民族学史』一九六三年、二五二ページ。
- (2) ゴーリキイ『作品集』第三巻、一九五一年、三五七ページ、同第二九巻、一九五五年、二二二ページ。
- (3) ポレヴォーイ『ロシア文学史』、クロポトキン『ロシア文学の理想と現実』など。スカピチューフスキイ『最新ロシア文学史』一九〇九年、二二八―二三三ページ。
- (4) こうしたエイヘンパーウムの論考は、例えばスカピチューフスキイへのアンチテーゼとして展開されたものである。
- (5) スローニム『ロシア文学の叙事詩』（邦訳『ロシア文学史』新潮社）四二ページ。
- (6) ビリングトン『アイコンと斧』一九六六年、五八〇ページ。
- (7) ソコロヴァ『メーリニコフ＝ベチュールスキイの長編小説『森の中で』『山の上で』の創作史の問題によせて』一九七

〇年、一〇八ページ。

- (8) メーリニコフ「自伝」三一八―一九ページ。
- (9) エリョーミン「メーリニコフ、伝記的概観」一九六三年、三八〇―一ページ。
- (10) 『文学遺産』第七九巻、一九六八年、一五二―三ページ、による。
- (11) ホイジングトン「メーリニコフとペチェールスキイ、地方旧教徒のロマンサー」一九七〇年、六八〇ページ。
- (12) コーシエレフ『シベリアのロシア民俗学』一九六二年。
- (13) ユーリイ・ロートマン「メーリニコフとペチェールスキイ」『ロシア文学史』第二巻、第二部、一九五六年、四三二―ページ。
- (14) 一八六四年に「ゲールツェンと交際のある革命家」のヤクーシキンがニージニイの町を訪れた際、彼の訪問と滞留は大きな物議をかもししたが、この時、メーリニコフが当時の県知事オガリョーフを議論の末に説得した。その経緯については、バラーンジン『ヤクーシキン、ロシア民俗学史より』一九六九年、二三七―二五五ページ。また、一八六一年にはニコライ・アレクサンドロヴィチ皇太子がヴォールガ流域を旅行してニージニイを訪問した時、メーリニコフが町と森の案内役となった。その折にニコライはメーリニコフの才能と土地にたいする造詣の深さを認めて「ヴォールガの彼方、森の中の生活がどのようなものかについての小説を書くことこそ、あなたの務めだ」と語ったという。ヴェンゲーロフ「メーリニコフ」『プロックハウス百科事典』第一九巻、四八ページ。
- (15) スカピチェーフスキイ、二二〇ページ。
- (16) メーリニコフ『七巻全集』一九〇九年、四〇四―五ページ。
- (17) レスコーフ「官途におけるナロードニキとラスコル研究者」全集第一巻、一九五六年、三六ページ。
- (18) ヤンチューク「メーリニコフとペチェールスキイ」『一九世紀ロシア文学史』第四巻、一九一〇年、一九八ページ。
- (19) レーヴィン「メーリニコフのエポペーヤ」一九五六年、一九ページ、による。
- (20) エリョーミン、三九〇ページ。

- (21) ダーリの伝記は、ベッサラプ、一九六八年、ポルドミンスキイ、一九七二年、小説家としてのダーリについては、ベア、一九七二年。また、栗原成郎「ヴラジーミル・ダーリ点描」『窓』第九号、一九七四年。
- (22) ベッサラプ、一七〇ページ。
- (23) 同上、一六八―一九ページ。
- (24) メーリニコフ「自伝」、三三五―三三六ページ、「未完の自伝の始まり」、三〇八―三〇九ページ。
- (25) これらの作品群に関しては、ホイジングトンの一連の論文が論じている。
- (26) 一三巻の資料集のタイトルは『ラスコールの現状』（一八五三―一八五四年）、論文は「ラスコールに関する賞書」（一八五六―一七七年）、「ラスコールに関する書簡」（一八六二年）など。
- (27) ソコロヴァ、一九七〇年、一〇九ページ。
- (28) ソコロヴァによれば、一八六〇年の雑誌「北の蜜蜂」に「マカーリイ近くで」と題された小説が発表され、これが『森の中で』につながるという。また、上記の注（14）を参照。
- (29) 当時のニージニイ・ノヴゴロドの富豪で、ザヴォールジエの旧教徒の庇護者であったП・Е・ブグロフという。また、マナーファとその他の修道尼も、そのイメージが作られたのは一八六九年にメーリニコフがケールジェニの尼僧のマルガリータとエスフィーリヤと知り合ったことによるという。イズマイロフ「メーリニコフ＝ベチェールスキイ」全集、第一巻、一九〇九年、七一―八ページ。
- (30) エジョーフ「メーリニコフ」『森の中で』一九五五年、八ページ。
- (31) 『文学遺産』第七九巻、五九二―五九三ページ。
- (32) チストーフ「メーリニコフとフェドソーフ」『スラヴ・フォークロア』所収、一九七二年、三二―三三ページ。
- (33) ノーヴィコフ『パーヴェル・ヴァシーリエヴィチ・シェイン』一九七二年、七五―七六ページ。
- (34) シポーフスキイ『一八世紀ロシア小説概観』第一巻、第二部、一九〇九―一〇〇年、五二―五三ページ。
- (35) ラヴローフ、ペシキン「メーリニコフ＝ベチェールスキイの郷土史学の仕事」『ソ連邦史』一九六一年、第四号。

参考文献

- Адрианов Ю. А. Шамшурин В. А.  
Старый Нижний. Историко-литературные очерки. Нижний Новгород. 1994
- Азадовский М. К.  
История русской фольклористики. Т. 1-2. М., 1958, 1963
- Его же  
Статьи о литературе и фольклоре. М.-Л., 1960
- Анцупова Е. А.  
К проблеме характеров в романах П. И. Мельникова «В лесах» и «На горах». — Проблемы русской литературы. М., 1973
- Афанасьев А. Н.  
Поэтические воззрения славян на природу. Т. 1-3. М., 1865-69
- Вагнецов Д. М.  
Раскольниковские типы в беллетристических произведениях П. И. Мельникова-Печерского. СПб., 1904
- Валандин А. И.  
П. И. Якушкин. Из истории русской фольклористики. М., 1969
- Валика Д.  
Библиотека П. И. Мельникова-Печерского. — Горьковская область. 1938, No. 3
- Бармина Т.  
Личная библиотека П. И. Мельникова-Печерского. — Волжский альманах. 1952, No. 8

Бессараб М.

Владимир Даль. Изд. 2-е. М., 1968

Бестужев-Рюмин К.

П. И. Мельников. Некролог. Журнал Министерства народного просвещения. 1883. No. 3, отд. 4

Буслаев Ф. И.

Исторические очерки русской народной словесности и искусства. Т. 1-2. СПб., 1861

Венгеров С. А.

Мельников.—Энциклопедический словарь Брокгауза Ефрона. Т. 37. 1896

Виноградов Г. С.

Опыт выяснения фольклорных источников романа Мельникова-Печерского «В лесах».—Советский фольклор, 1935, No. 2-3

Его же

Фольклорные источники романа Мельникова-Печерского «В лесах».—Мельников П. И. В лесах. Ч. 1-2. М.-Л., 1936

Власова З. И.

П. И. Мельников.—Русская литература и фольклор. (Вторая половина 19 в.) Л., 1982

Волконский А.

П. И. Мельников-Печерский.—Горьковская область. 1938, No. 3

Гибет Е.

П. И. Мельников.—Русские писатели в Москве. М., 1973

Даль В. И.

- Толковый словарь живого великорусского языка. Т. 1-4. М., 1956
- Его же
- Пословицы русского народа. М., 1957
- Ежов И. С.
- П. И. Мельников (Андрей Печерский).—В лесах. Кн. 1. М., 1955
- Еремин М. П.
- П. И. Мельников (Андрей Печерский). Критикобиблиографический очерк.—Собрание сочинений в шести томах. Т. 6. М., 1963
- Зморович А. И.
- О языке и стиле произведений П. И. Мельникова.—Русский филологический вестник. 1916, No. 1-2
- Измайлов А. А.
- П. И. Мельников-Печерский. (Критикобиблиографический очерк) —Полное собрание сочинений. Т. 1. СПб., 1909
- Канкава М. В.
- О влиянии В. И. Даля на стиль писателей этнографической школы.—Поэтика и стилистика русской литературы. Л., 1971
- Кирсеевский П. В.
- Песни. Новая серия. Вып. 1-3. М., 1911-29
- Колесницкая И. М.
- О фольклорной деятельности Мельникова.—Литературное наследство. Т. 79. М., 1968
- Кошелев Я. Р.
- Русская фольклористика Сибири 19-начала 20 в. Томск, 1962

Лавров Д. К. Песикин Ф. А.

Историко-краеведческие труды П. И. Мельникова-Печерского.—История СССР, 1961, No. 4

Левин Ф. М.

Эпопея П. И. Мельникова (Андрея Печерского).—На горах. Кн. 1. М., 1956

Его же

Мельников.—Краткая литературная энциклопедия. Т. 4

Лесков П. С.

Народники и расколоведы на службе.—Собрание сочинений. Т. 11. М., 1956

Литературное наследство. Т. 79. Песни, собранные писателями. Новые материалы из архива П. И. Киреевского. М., 1968

Лотман Л. М.

П. И. Мельников-Печерский.—История русской литературы. Т. 9, ч. 2. М.-Л., 1956

Ее же

Роман из народной жизни. Этнографический роман.—История русского романа в двух томах. Т. 2. М.-Л., 1964

Ее же

Реализм русской литературы 60 годов 19 века. Л., 1974

Лотман Ю. М.

Мельников.—Русские писатели. Библиографический словарь. М., 1971

Марков Д. А.

Язык и стиль П. И. Мельникова-Печерского в оценке русской критики.—Уч. зап. Моск. обл. пед. ин-та. Т. 48, вып. 4. 1957

Его же

Дата рождения П. И. Мельникова.—Там же. Т. 66, вып. 4. 1958

Его же

Особенности лексики романа Мельникова-Печерского «В лесах».—Там же. Т. 102, вып. 7. 1961

Его же

Словарь к роману П. И. Мельникова-Печерского «В лесах».—Там же. Т. 102, вып. 7. 1961

Мельников А. П.

Очерки бытовой нижегородской ярмарки (1817-1917). Нижний Новгород, 1917; Изд. 2-е. 1993

Мельников П. И.

Полное собрание сочинений. Изд. 2-е. Т. 1-7. СПб., 1909

Его же

Собрание сочинений в шести томах. М., 1963

Его же

Собрание сочинений в восьми томах. М., 1976

Его же

В лесах. Кн. 1-2. М., 1956 (1958, 1979)

Его же

Очерки мордвы. Саранск, 1981

Его же

Рассказы и повести. М., 1982

Его же

Повести и рассказы. М., 1985

Его же

Начало неоконченной автобиографии.—Мельников. Собрание сочинении в шести томах. Т. 1. М., 1963

Его же

Автобиография.—Там же

Его же

Нижегородская ярмарка в 1843, 1844 и 1845 годах. Нижний Новгород. 1846

Его же

Владимир Иванович Даль. Критикобиблиографический очерк.—Полное собрание сочинений В. И. Даля. Т. 1. СПб., 1897

Миллер О. Ф.

Русские писатели после Гоголя. Ч. 3. СПб., 1885

Милонов Н. А.

Литературное краеведение. М., 1985

Новиков Н. В.

Павел Васильевич Шейн. Минск. 1972

Пиксанов Н. К.

Областные культурные гнезда. М.-Л., 1928

Порудоминский В. И.

Даль. М., 1971

Пыпин А. Н.

- История русской этнографии. Т. 1–4. СПб., 1890–92
- Сиповский В. В.  
Очерки из истории русского романа. Т. 1, вып. 1–2. СПб., 1909–10
- Скабичевский А. М.  
История новейшей литературы 1848–1908 гг. Изд. 4-с. СПб., 1909
- Смирнов Д. Н.  
Нижегородская старина. Нижний Новгород, 1995
- Собрание народных песен П. В. Киреевского.  
Записи Языковых в симбирской и оренбургской губерниях. Т. 1. Л., 1977; Записи П. И. Якушкина. Т. 1. Л., 1983 :  
Т. 2. Л., 1986
- Соймонов А. Д.  
П. В. Киреевский и его собрание народных песен. Л., 1971
- Соколов Б. М.  
Собиратели народных песен. П. В. Киреевский, П. И. Якушкин и П. В. Шейн. М., 1923
- Соколова В. Ф.  
К вопросу о творческой истории романов П. И. Мельникова-Печерского «В лесах» и «На горах».—Русская литература, 1970, No. 3
- Ее же  
П. И. Мельников-Печерский—исследователь жизни Поволжья.—Волга, 1970, No. 2
- Ее же  
Еще раз о фольклорных источниках романа П. И. Мельникова-Печерского «В лесах».—Поэтика и стилистика рус-



- The Icon and the Axe: An Interpretive History of Russian Culture. N. Y. 1966  
Hoisington T. H.
- Melnikov-Pechersky : Romancer of Provincial and Old Believer Life. *Slavic Review*, 1974, No. 12
- 
- Romance--a Congenial Form : Mel'nikov-Pecherski's Grandma's Yarns and Olden Times. *Russian Literature*, 36, 1977
- 
- Dark Romance in a Provincial Setting : Mel'nikov-Pecherski's The Krasil'nikovs. *Slavic and East European Journal*, 22, 1978
- Melnikov-Petcherski P. I.
- Dans les forets. Traduit du russe et preface par Sylvie Luneau. Gallimard. 1957
- Mirsky D. S.
- A History of Russian Literature from its beginnings to 1900. N. Y. 1958
- Slonim M.
- The Epic of Russian Literature. N. Y. 1972

本論文は平成九年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号〇七八〇一〇七一)による研究成果の一部である。